

つ わ だ だい い せき たけ が しま だい い せき
津和田第2遺跡・竹ヶ島第2遺跡

—集合住宅建設、宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



2021

宮崎市教育委員会

つ わ だ だい い せき たけ が しま だい い せき
津和田第2遺跡・竹ヶ島第2遺跡

—集合住宅建設、宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2021

宮崎市教育委員会

序 文

本書は平成 27 年度に実施された、津和田第 2 遺跡、竹ヶ島第 2 遺跡の発掘調査報告書です。

津和田第 2 遺跡は宮崎空港にほど近い位置にあり、弥生時代や古代、江戸時代の人々が営んだ生活の痕跡が確認されました。竹ヶ島第 2 遺跡は、佐土原町の石崎川下流域にある遺跡で、江戸時代の道路跡のほか、弥生時代の人々の生活の痕跡なども確認されています。

今回報告する 2 つの遺跡の発掘調査の成果によって、地域の歴史のこれまで知られていなかった新たな一面を知ることができるのは、大変有意義なことです。しかし一方で、その発掘調査は、おもに開発によって失われる遺跡を対象におこなわれていることもまた、忘れてはなりません。私たちは、こうした事実を真摯に受け止め、どのようにして地域の歴史を大切に守り伝えていくことができるのか考え続けていく必要があります。

また、本書が一つのきっかけとなり、より広く宮崎市の文化、歴史を守り伝えていくことの一助となれば幸いです。

令和 3 年 3 月

宮崎市教育委員会

教育長 西 田 幸 一 郎

例　言

1. 本書は、宮崎市教育委員会が平成 27 年度に実施した津和田第 2 遺跡および竹ヶ島第 2 遺跡の発掘調査報告書である。

2. それぞれの発掘調査は以下の期間実施した。

【発掘調査】

津和田第 2 遺跡 平成 27 年 5 月 11 日から平成 27 年 8 月 6 日まで

竹ヶ島第 2 遺跡 平成 27 年 8 月 25 日から平成 27 年 10 月 2 日まで

【整理作業】

津和田第 2 遺跡 平成 28 年 9 月 15 日から平成 28 年 10 月 31 日まで

竹ヶ島第 2 遺跡 平成 28 年 5 月 13 日から平成 28 年 6 月 16 日まで

3. 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会

現地調査

総括 文化財課長 日高 貞幸

埋蔵文化財係長 井田 篤

事務 主 査 鳥枝 誠

担当 主 任 技 師 西嶋 剛広

嘱 託 大嶋 昭海 (津和田第 2 遺跡)

整理作業

総括 文化財課長 日高 貞幸

埋蔵文化財係長 井田 篤

事務 主 任 主 事 武富 知子

担当 主 任 技 師 西嶋 剛広

嘱 託 小野 貞子

嘱 託 佐伯美佐子

嘱 託 徳丸 理奈

4. 本書の執筆、編集は西嶋がおこなった。

5. 掲載した図面のうち、現場における実測は西嶋、大嶋がおこなった。遺物の実測は西嶋、小野、佐伯、徳丸が整理作業員の協力を得ておこなった。

6. 現場の写真撮影は西嶋、大嶋が、出土遺物の写真撮影は西嶋がおこなった。

7. 本書の方位記号はすべて真北を示す。

8. 本書で使用する遺構略号は以下のとおりである。

竪穴建物 : SA、土坑 : SC、土坑墓 : SD、溝状遺構 : SE、道路状遺構 : SG、ピット : SH、周溝状遺構 : SL

9. 本調査における出土遺物、実測図、撮影写真などはすべて宮崎市教育委員会で保管している。

本文目次

第I部 津和田第2遺跡	
第I章 遺跡周辺の環境	
第1節 地理的環境……………	3
第2節 歴史的環境……………	3
第II章 調査にいたる経緯と調査の経過	
第1節 調査にいたる経緯……………	6
第2節 調査の経緯……………	6
第III章 調査の成果	
第1節 調査地の基本土層……………	8
第2節 弥生時代の遺構……………	8
第3節 古代の遺構……………	15
第4節 近世の遺構……………	19
第5節 時期が不明確な遺構……………	24
第6節 その他の遺物……………	25
第IV章 まとめ……………	31
第II部 竹ヶ島第2遺跡	
第I章 遺跡周辺の環境	
第1節 地理的環境……………	53
第2節 歴史的環境……………	53
第II章 調査にいたる経緯と調査の経過	
第1節 調査にいたる経緯……………	55
第2節 調査の経緯……………	55
第III章 調査の成果	
第1節 調査地の基本土層……………	57
第2節 弥生時代の遺構……………	57
第3節 古代の遺構……………	58
第4節 中世の遺構……………	59
第5節 近世以降の遺構……………	59
第6節 遺構外出土遺物……………	64
第IV章 まとめ……………	68

挿図目次

第1図 津和田第2遺跡と周辺の遺跡…	5
第2図 津和田第2遺跡調査区位置図…	7
第3図 津和田第2遺跡調査区平面図…	9
第4図 竪穴建物16、周溝状遺構48、 土坑73、および出土遺物	10
第5図 周溝状遺構45……………	12
第6図 周溝状遺構45出土遺物	13
第7図 周溝状遺構59、同出土遺物	14
第8図 土坑12、同出土遺物	15
第9図 土坑63、溝状遺構65、ピット64 ……………	15
第10図 土坑1、同出土遺物	16
第11図 土坑1出土遺物	17
第12図 土坑49、同出土遺物	18
第13図 土坑3、46、土坑墓6、55	20
第14図 土坑墓7、8、同出土遺物	21
第15図 溝状遺構13、14、15土層断面、 同出土遺物	22
第16図 その他の出土遺物	26
第17図 竹ヶ島第2遺跡と周辺の遺跡…	54
第18図 竹ヶ島第2遺跡調査区位置図…	56
第19図 竹ヶ島第2遺跡調査区平面図…	57
第20図 土坑4、7および土坑7出土遺物 ……………	58
第21図 道路状遺構3、溝状遺構2、14 ……………	60
第22図 道路状遺構3、溝状遺構8出土遺物 ……………	61
第23図 道路状遺構3出土遺物	62
第24図 溝状遺構1、2土層断面図	63
第25図 ピット出土遺物	63
第26図 遺構外出土遺物1	65
第27図 遺構外出土遺物2	66

表 目 次

第1表	津和田第2遺跡出土遺物観察表1	27
第2表	津和田第2遺跡出土遺物観察表2	28
第3表	津和田第2遺跡出土遺物観察表3	29
第4表	津和田第2遺跡出土遺物観察表4	30
第5表	竹ヶ島第2遺跡出土遺物観察表	67

図版22	道路状遺構3②	72
図版23	溝状遺構1、2	73
図版24	溝状遺構6、8、10	74
図版25	溝状遺構14、溝状遺構出土遺物	75
図版26	ピット	76
図版27	遺構外出土遺物①	77
図版28	遺構外出土遺物②	78

図 版 目 次

図版1	津和田第2遺跡調査区全景	33
図版2	竪穴建物16、周溝状遺構48	34
図版3	周溝状遺構45	35
図版4	周溝状遺構45出土遺物	36
図版5	周溝状遺構59	37
図版6	土坑12	38
図版7	土坑63、ピット64、溝状遺構65	39
図版8	土坑1	40
図版9	土坑1出土遺物	41
図版10	土坑49	42
図版11	土坑3、土坑墓6	43
図版12	土坑46、土坑墓55	44
図版13	土坑墓7、8	45
図版14	土坑墓8	46
図版15	土坑墓出土遺物	47
図版16	溝状遺構13、14	48
図版17	溝状遺構18、溝状遺構出土遺物	49
図版18	他の出土遺物	50
図版19	竹ヶ島第2遺跡調査区全景	69
図版20	土坑4、7	70
図版21	道路状遺構3①	71

第Ⅰ部 津和田第2遺跡

第1章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境

津和田第2遺跡は、宮崎県宮崎市大字本郷北方字津和田に所在する。宮崎市は九州島東南部にある宮崎平野の南半を占めており、河川流域でいえば大淀川下流域に位置している。市域は北を一つ瀬川、南は鰐塚山地、東は日向灘、西は九州山地の一部を限りとしている。市域の地形は山地、そこから派生する丘陵や台地状の地形、段丘面、河川の作用による沖積地や自然堤防、そして海岸線にのびる4本の砂丘列とその後背湿地で形成されており、地区ごとで多様な地形、地質がみられる。この中を幾筋もの河川が流れているが、大淀川、石崎川、清武川などが主要な河川である。

津和田第2遺跡は、このうち大淀川右岸の河口域にある。この周辺は市域西側の山地からのびる丘陵地形と、その直下にある砂丘状地形、自然堤防などの微高地や、その間に広がる氾濫平野がある。遺跡はこのうちの砂丘状地形の上にあり、周辺の標高は約5.0mである。

第2節 歴史的環境

津和田第2遺跡周辺には複数の遺跡が確認されているが、これまでに確認された遺跡は丘陵上、砂丘あるいは自然堤防などの微高地上に限られており、氾濫平野部では確認されていない。

旧石器時代、縄文時代のおもな遺跡に源藤遺跡、曾井遺跡がある。いずれも八重川を望む独立丘陵上に立地する遺跡で、前者からはナイフ形石器、三稜尖頭器、スクレーパーなどの旧石器や、炉穴を含む6基の土坑、縄文早期の土器が出土している。曾井遺跡では、縄文中期から後晩期の土器が確認されている。微高地上での縄文時代遺跡はこれまで未確認であったが、今回報告する津和田第2遺跡では、縄文時代中期の土器片が出土したことから、この時期、一部丘陵上以外の場所に人々の生活が営まれていたことが明らかになった。

弥生時代以降になると、微高地上にも多くの人々の生活の痕跡が確認されるようになる。大淀川の支流である八重川沿いの微高地上にある下鶴遺跡では、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての土坑墓5基が確認されたほか、弥生時代中期の山ノ口式土器も出土しており、当該時期の墓域や集落が広がっていることが想定されている。そのほか、現在の宮崎空港周辺では、空港建設の際に多量の弥生土器が出土したという〔宮崎県編1993:p.534〕。また、詳細は定かでないが「飛行場の滑走路東側（場外）において、「敷石住居址」が確認されたという〔石川編1964:pp.29-30〕。今回報告する津和田第2遺跡含め、弥生時代に周辺の微高地上に人々の生活域が広く展開していたことがわかる。丘陵上にある源藤遺跡では弥生時代中期後半から後期初頭、終末期にかかる大規模な集落が形成され、終末期の堅穴建物からは、線刻で文様が描かれた加飾壺などの特徴的な遺物が出土している。曾井遺跡でも弥生時代中期末、後期末の遺物が多く確認されている。丘陵頂部を削平されているため遺構の様相は知れないが、源藤遺跡とあわせて弥生時代の拠点的な集落が存在したものと考えられる。両遺跡から古城川を遡ったやや内陸側には弥生時代終末期の土器製作遺跡とされる中岡遺跡があり、八重川流域に所在する弥生時代遺跡同士がどのような関連性をもっていたのか注目される。

古墳時代の集落としては、源藤遺跡で多くの古墳時代後期の堅穴建物が確認され、規模の大きな集落が存在したものと考えられる。曾井遺跡でも古墳時代中期から後期の遺物が出土している。

古墳もいくつかの存在が確認されている。曾井遺跡のある丘陵には前方後円墳が存在し、そこからかつて方格規矩鏡片、剣、玉類、朱の付着した貨泉が出土したとされているものの、古い年代の土地開墾にともなう不時発見でありその詳細を知ることはできない。貨泉自体は現在、宮崎県総合博物館で保管されている。そのほかこの丘陵の斜面には横穴が3基確認されている。また、大淀川河口域に近い微高地上には、福長院塚古墳がある。現状での直径が約40mの大型円墳で、過去に剣、鎌、鏡が出土したとされている。埋葬施設についても不明だが、横穴式石室の可能性が想定されており、築造時期は古墳時代後期後半と考えられている〔宮崎県編1993:p.505〕。

古代には当地域周辺は宮崎郡の域内に含まれる地域である。遺跡は微高地上に多く確認されており、津和田第2遺跡、津和田第3遺跡、池田遺跡、西田第2遺跡、松ヶ迫窯跡群、榎田遺跡などがある。池田遺跡では丘陵斜面直下の湿地から多くの須恵器、土師器が出土している。松ヶ迫窯跡は、8世紀前半の須恵器窯跡であり、確認された半地下式構造の3基の窯跡からは、壺蓋、高台付塊、甕などが出土している。上記、曾井遺跡でも古代の遺物が多く出土している。周辺は国富荘など八条女院領として発展する地域であるが、このような古代遺跡の事例は、この莊園の開発との何らかの関わりが想定される必要があるだろう。

中世の遺跡も古代同様に、微高地上を中心に散見される。本調査が実施された事例には、12～16世紀にかけての遺構、遺物が確認された下鶴遺跡がある。最大幅3.4mの溝状遺構などの遺構が注目されるほか、多くの貿易陶磁、瓦器が出土するなど河口付近に立地した本遺跡の性格を示唆する。ほかにも詳細不明であるが、津和田一体で、輸入陶磁器を含む多くの土器片が採集されたとの記載が大正年間の新聞記事にあり、周辺一体が交易の窓口としての役割を担っていたことがうかがえる。

近世には周辺は低肥藩領となり、清武町中野に地頭が置かれた。また、大淀川河口付近に位置する城ヶ崎町は、天文20(1551)年に開かれた町とされているが、以降、当地域の貿易の拠点として栄えた。それを背景に近世には華やかな町人文化が花開き、現在は「城ヶ崎俳人墓地」にその痕跡を認めることができる。近世の遺跡の調査事例としては、上記下鶴遺跡や今回報告の津和田第2遺跡で土坑墓が確認されているほかは様相が明らかでない。



第1図 津和田第2遺跡と周辺の遺跡 (S=1:25000)

第Ⅱ章 調査にいたる経緯と調査の経過

第1節 調査にいたる経緯

平成 26（2014）年 9 月 15 日、集合住宅の建築とともに、宮崎市大字本郷北方字津和田 3229 番 3 外における埋蔵文化財の有無について照会がなされた。周辺は八重川下流域の微高地に位置し埋蔵文化財の存在が想定されることから、平成 26 年 9 月 29～30 日に事前の試掘調査を実施した。その結果、埋蔵文化財の存在が確認され、平成 26 年 10 月 22 日付けで周知の埋蔵文化財包蔵地「津和田第 2 遺跡」となった。

これによって、事業者と埋蔵文化財の取り扱いにかんする協議をおこない、遺構への影響などから埋蔵文化財の本発掘調査が避けられない部分を対象として本発掘調査を実施することとなつた。現地での調査は平成 27 年 5 月 11 日から平成 27 年 8 月 6 日までの期間実施した。調査終了後の整理作業については、平成 28 年 9 月 15 日から 10 月 31 日までの期間実施した。

なお、本発掘調査に関わる文書手続きは以下の通りである。

進達文書 平成 27 年 3 月 2 日（宗教文第 992 号 1）工事届（文化財保護法第 93 条）

伝達文書 平成 27 年 3 月 9 日（宗教文第 992 号 3）

着手報告 平成 27 年 6 月 3 日（宗教文第 207 号）

完了報告 平成 27 年 8 月 11 日（宗教文第 207 号 1）

発見通知 平成 27 年 8 月 11 日（宗教文第 474 号）

保管証 平成 27 年 8 月 20 日（宗教文第 474 号 1）

第2節 調査の経過

調査は本発掘調査の対象となる部分に調査区を設定し、合計で約 330 平方メートルの本発掘調査をおこなつた。

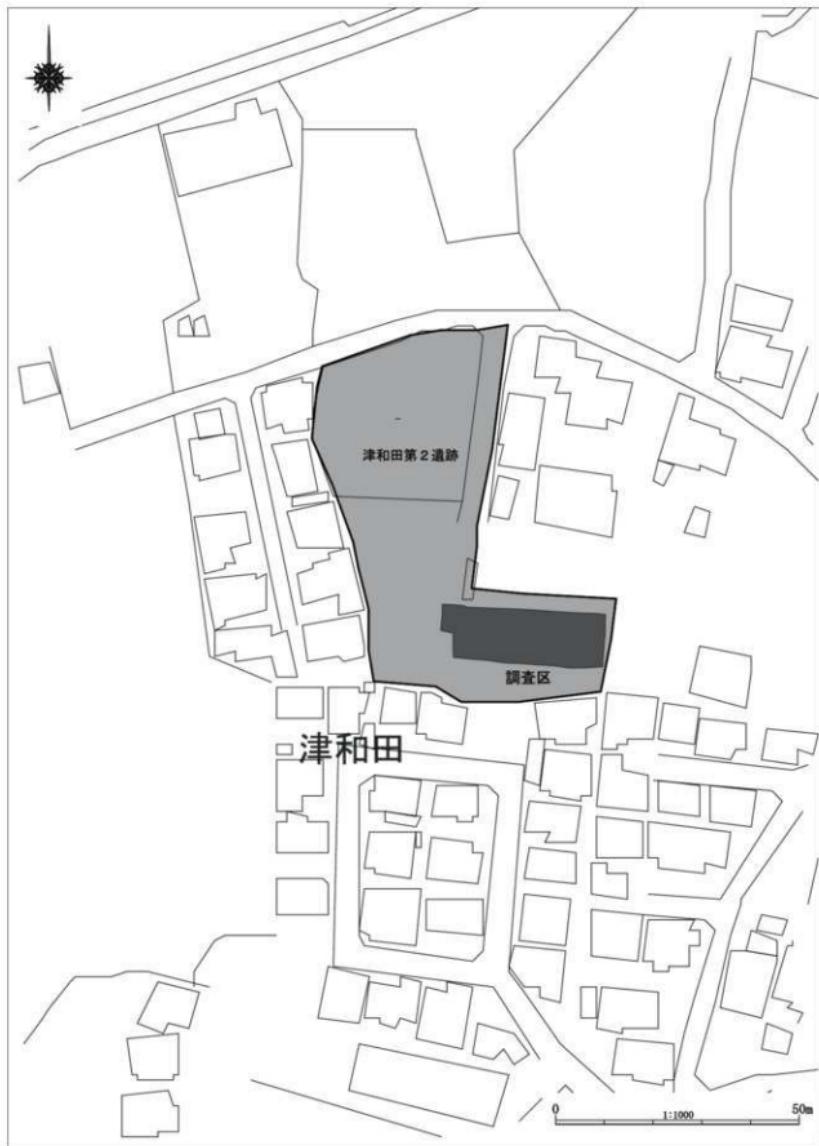
調査は、まず重機を用いた表土の除去作業から実施した。その後、発掘作業員によって遺構検出作業を実施した結果、弥生時代、古代、近世などの遺構が検出された。これらの遺構について順次掘削作業をおこなつた。

掘削の進んだ遺構については、記録作業を実施した。記録作業は調査員の手測りによる実測作業、35 mm フィルムカメラ、中判フィルムカメラ、デジタルカメラを用いた写真撮影によつた。

調査の終了後には、重機によって排出した土の埋め戻し作業をおこない、調査前の状況に復旧し、現地における発掘調査を終了した。



周溝状遺構 45 検出状況



第2図 津和田第2遺跡調査区位置図 (S=1:1000)

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査地の基本土層

今回調査地の基本土層については、以下の通りである。

I層：表土層。暗褐色で縮りの弱い粘質土層。近現代の遺物が含まれる。

調査地での層厚は約40cm。

II層：いわゆるクロボク土層。色調などより以下の2層に細分可能。

II-1層：黒褐色粘質土層。縮りが強い。わずかに地山層が含まれる。

土器片をまばらに含む遺物包含層。

調査地での層厚は10cm以下。

II-2層：暗褐色粘質土層。縮りがある。地山層が含まれる。

遺物はほとんど含まない。

調査地での層厚は約5～10cm。

III層：地山層。黄褐色砂質土層。わずかに粘性がある。縮りがある。

いわゆる黄砂層で市域沖積地の微高地に堆積する砂質土の最上層。

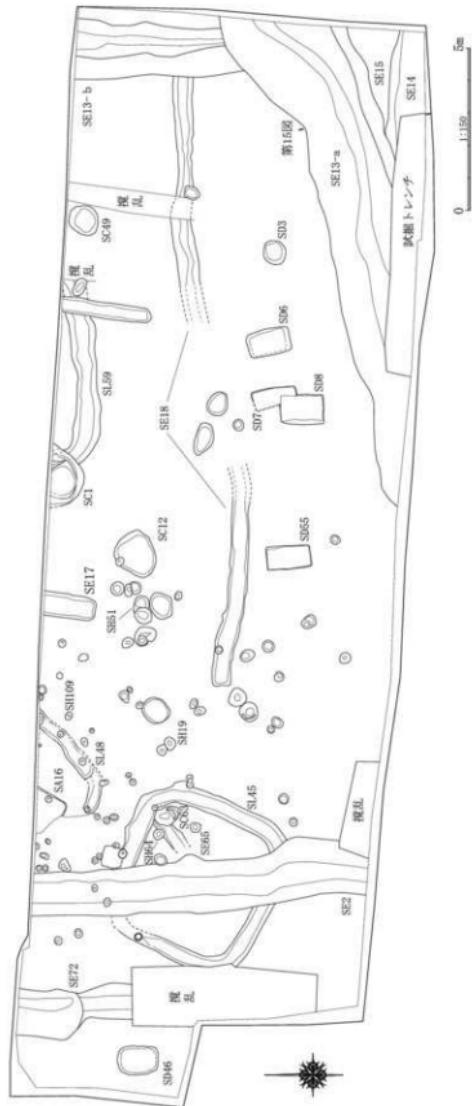
調査の結果から、遺物包含層であるII-1層は一定程度の削平を受けていると考えられる。今回調査での遺構検出は、上記のIII層上面でおこなった。

第2節 弥生時代の遺構

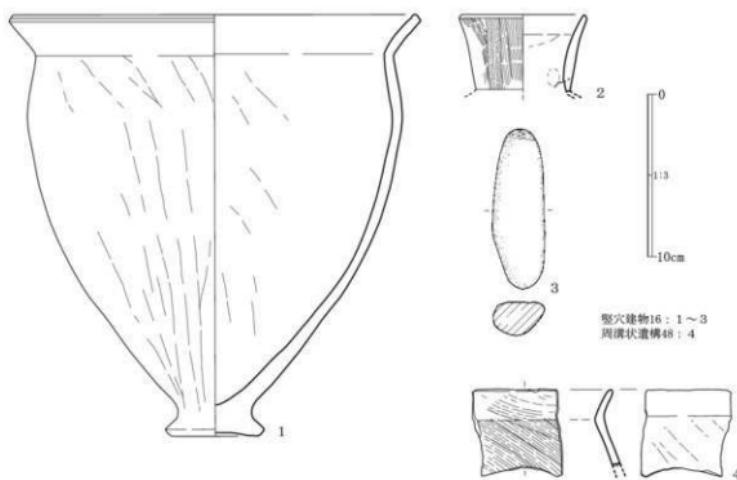
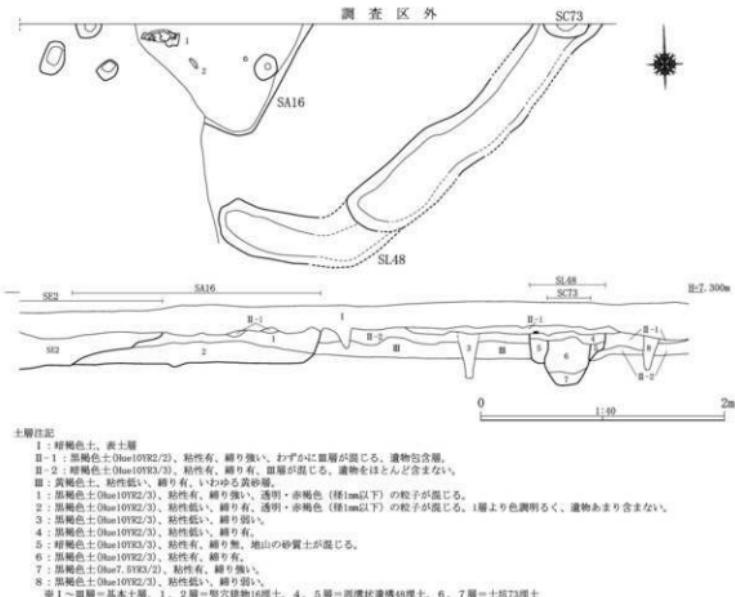
竪穴建物

竪穴建物16（第4図） 調査区北壁際中央よりやや西側で検出された。北側は調査区外におよんでいること、西側は近世の溝状遺構に削平されていることから、竪穴建物の南東隅角の一部のみが確認できた。平面形は方形ないし長方形と推測されるが明確ではない。確認された部分の規模は、南北方向の辺の長さが2.18m、東西方向の辺の長さが0.78mである。調査区北壁で確認できる深さは約0.6mである。南北辺の壁際にピット1基が検出された。本建物にともなう可能性もあるが、明確ではない。加えて近世の溝状遺構に床面まで削平された部分に3基のピットが確認されたが、位置関係からこれらも本竪穴建物にともなう可能性がある。土層は2層に分層できた。いずれも黒褐色の粘質土層で良く似た土層である。

遺物は竪穴建物内から散在した状態で出土している。遺物はおもに1層の下位から出土し、床面直上に堆積する2層ではあまり出土しなかった。残存する遺構の北西隅部分では甕が横倒しになった状態で出土した。1、2は弥生土器である。1は甕で口縁部は短く外方に屈曲する。胸部は上位に最大径があり、そこから底部に向かってすぼまっていく形態である。底部には脚が取り付けられており、わずかに上げ底状になっている。内外面とも工具によるナデ調整が施されている。2は壺の口縁部でわずかに外反しながら立ち上がっている。調整は外面にはハケ調整、内面にはナデ調整が施されている。3は蔽石である。細長い形状の砂岩で、図での上端付近に敲打痕が認められる。出土した土器は、いずれも弥生時代後期後半から終末期に位置付けられる。



第3図 津和田第2遺跡調査区平面図 (S=1:150)



第4図 竪穴建物16、周溝状遺構48、土坑73、および出土遺物 (S=1:40、1:3)

周溝状遺構

周溝状遺構 48（第4図） 調査区北壁際中央付近で検出された。堅穴建物 16 と同様に、北側が調査区外におよんでいること、西側は近世の溝状遺構に削平されていることから全体形および規模を知れないが、周溝が隅丸方形にめぐる形態から周溝状遺構と判断した。確認された部分での周溝幅は約 0.6 m で、隣接する周溝状遺構 45 と比べて広い。深さは調査区北壁の断面で確認できた数値で 0.64 m である。周溝底面はおおむね平坦で断面形は U 字形である。

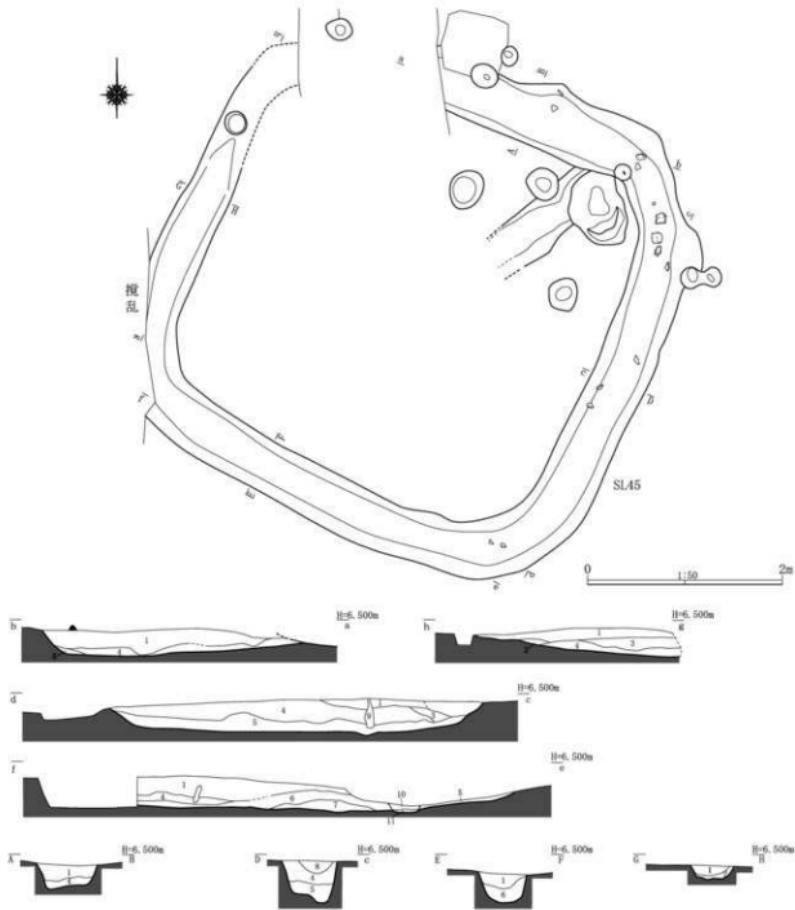
土層は 2 層に分層できた。黒褐色ないし暗褐色の粘質土層である。土層の観察からは、周溝の再掘削や周溝内への滯水の様子は確認できなかった。

4 は弥生土器である。甕の口縁部片である。口縁部は短く外方に屈曲する。外面の調整はナデ調整、内面はハケ調整が施されている。周溝状遺構 45 同様に弥生時代後期後半から終末期に位置付けられる。

周溝状遺構 45（第5、6図） 調査区中央付近やや西寄りで検出された。中央付近を南北方向にのびる近世以降の溝状遺構 2 に切られている。平面形は隅丸方形で、周溝外周の長軸（東西南北向）は 5.1 m、短軸（南北方向）は 4.9 m である。周溝の断面形は U 字形である。北東隅角部分は、遺構検出時点で周溝が途切れた状態であった。このことについては、遺構が構築された段階でこのような状態であったものとは考えにくく、底面のレベルが北東隅角に向かって高くなっていることから、本来周溝は全周していたものの、後世の造成（基本土層 I 層）により削平を受けているものと推測される。

土層は 8 層に分層できた。黒褐色ないし暗褐色の粘質土層である。周溝について各辺を横断、縦断する形で断面線を設定し土層の確認をおこなった。観察の結果、周溝の再掘削痕跡は認められなかった。土層には滯水の可能性を示唆する痕跡などは認められなかった。ただし、周溝南辺の中央付近底面に鉄分が凝集する箇所があったことから、周溝内に水が溜まっていた時期が存在する可能性もあるが明確でない。

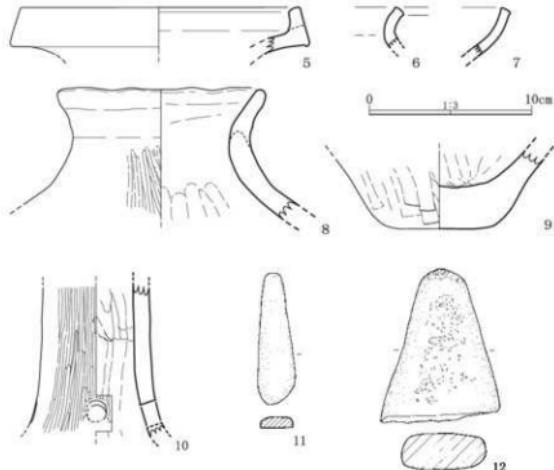
遺物は、土器、石器が周溝内から散在する状態で出土した。土器はいずれも小破片であり、出土状況からは明らかに本遺構にともなうと判断できる土器などは存在しなかった。5 から 10 は弥生土器である。5、8 は甕、6 は甕ないし壺である。5 は口縁部の小片である。6 は短く外方に屈曲している。8 は口縁部から肩部にかけての破片である。口縁部は短く外方に屈曲し、端部は丸く收められている。頸部から肩部は緩やかに聞く形態で境界は明瞭でない。調整は外面には縦方向のミガキ調整が、内面にはナデ調整が施されている。7 は鉢の口縁部とみられ、外方に大きく開いている。9 は甕ないし甕の底部片である。平底で厚みがあり胴部は外方へ直線的に開いている。内外面ともに工具によるナデ調整が施されている。10 は高杯あるいは器台の脚部片である。下方に向かってわずかに聞く形態で円形の透孔が確認できる。外面は細かな縦方向のミガキ調整が施されている。内面は縦方向のユビナデ調整が施されており、部分的に粘土のたるみが認められる。11 は砥石である。砂岩で、形態は図上で下方へ幅が広がる細長い形態で、片面が平らになっている。12 は敲石である。不整形の砂岩で断面形態は長楕円形である。全体的に敲打痕が認められ、特に図での上端では顕著である。出土した土器はいずれも弥生時代後期後半から終末期にかけてのものである。



土層注記

- 1: 黒褐色土 (Obs10Y22/3)。粘性有、繊り弱い。地山ブロックわずかに含む。
- 2: 増粘土 (Obs10Y3/4)。粘性弱い、繊り弱い、砂質土。
- 3: 黒褐色土 (Obs10Y22/2)。繊り弱い、4層より色濃や暗い。
- 4: 黑褐色土 (Obs10Y22/2)。粘性有、地山ブロック、褐色土ブロックを含む。
5: 分分とみられる赤褐色土を含む。
- 5: 黑褐色土 (Obs10Y22/2)。粘性有、繊り弱い、4層と同じ赤褐色粒子を多く含む。地山はほとんど含まない。
- 6: 黑褐色土 (Obs10Y22/2)。粘性有、繊り弱い、砂質土。
- 7: 黑褐色土 (Obs10Y22/2)。粘性有、シルトないし砂質土で部分の沈着が非常に顯著。
- 8: 黑褐色土 (Obs10Y22/2)。粘性弱い、繊り有、4層よりわずかに明る。地山ブロック少含む。
- 9: 黑褐色土 (Obs10Y22/2)。粘性有、繊り強。
- 10: 黑褐色土 (Obs10Y22/2)。粘性強い、繊り弱い。
- 11: 黑褐色土 (Obs10Y22/2)。3層に似るがやや暗い。

第5図 周溝状遺構 45 (S=1:50)



第6図 周溝状遺構 45 出土遺物 (S=1:3)

周溝状遺構 59 (第7図)

調査区北壁側中央付近で検出された。遺構の大部分が調査区外におよんでいる。また調査区内において西端が土坑1に、東端が搅乱に切られているため、全体形および規模を知れない。しかし、溝が隅丸方形状にめぐるとみられる事から周溝状遺構と判断した。全体の規模は不明であるが、検出できた南辺側の長さは約5.5mである。確認できる部分での周溝幅は、0.8~0.5mである。周溝は底面がおおむね平坦であり、断面形はU字形である。検出面からの深さは約0.1mである。

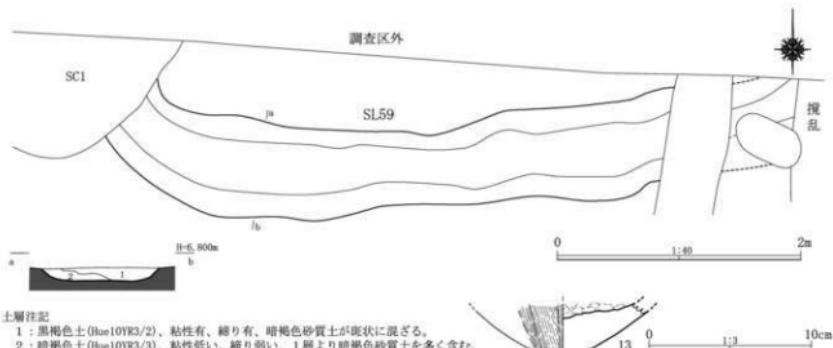
土層は2層に分層できた。残存していたのが遺構底面付近のみであったため、明確ではないが、再掘削や滯水の痕跡は確認できなかった。

13は弥生土器の甕底部である。厚みがある平底気味の底部形態で、胴部は外方に向かって大きく開いている。その他、弥生土器の小片が出土した。遺物が小片のみであり明確ではないが、そのほかの周溝状遺構とほぼ同じ時期、すなわち弥生時代後期後半から終末期のものと考えられる。

土坑

土坑12 (第8図) 調査区中央北壁側で検出された。平面形が不整形な卵形で、断面が浅い皿状の土坑である。北半がわずかに掘り進められており、底面は二段掘り状になっている。遺構の西辺の一部をピットに切られている。規模は、長さ1.39m、幅1.22m、検出面からの深さは0.14mである。土坑の中心付近の床面はわずかに被熱により赤化している箇所が認められた。埋土は2層に分層できるが、下層(2層)は地山ブロックが斑状に多く含まれ、焼土がわずかに含まれていた。その上層(1層)には炭化物がわずかに含まれていた。床面の被熱から土坑内での火の使用が想定されるものの、具体的な機能については判然としない。

遺物は土坑の北半部を中心に多くの遺物が出土した。出土層位はすべて1層で、床面直上の2層からは遺物は出土していない。土器はいずれも破碎した状態で完形に復元できるものはなかった。14から18は土師器である。14は小型の鉢で手捏ねで成形されている。底部は平底で胴部から口縁部にかけて内彎しながら立ち上がる形態である。外面には成形時のユビナデ、ユビオサエ痕跡が明瞭で、内面にはナデ調整が施されている。15は小型器台である。受部下部と脚部の



第7図 周溝状遺構 59、同出土遺物 (S=1:40, 1:3)

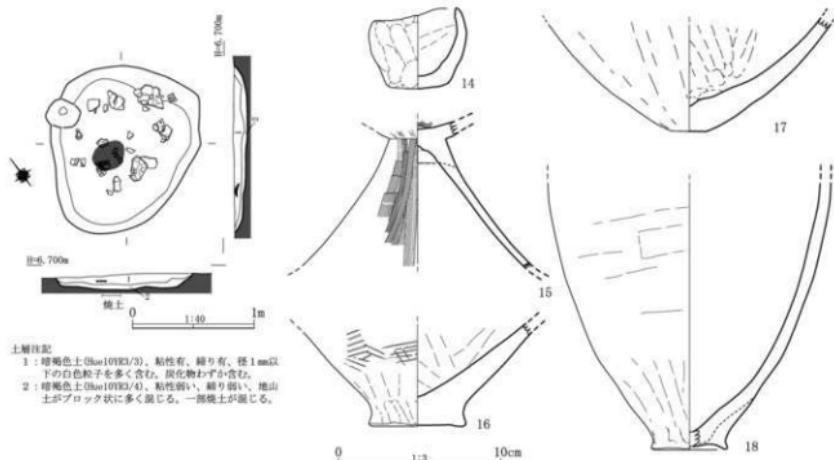
破片で、受部の形態は遺存状態が悪く不明である。脚部は裾に向かって大きく開く形態で裾部ほど器壁が薄い。外面にはハケ調整が施されている。16は甕の底部片である。厚みのある平底で胴部は直線的に外方に向かって立ち上がっている。外面の底部付近にはナデ調整が施されており、胴部にはタタキ目が確認できる。内面にはナデ調整が施されている。17は甕ないし壺の底部片である。丸底状であるが底面には平坦面が存在する。胴部は内彎しながら外方に向かって立ち上がっている。内外面ともにナデ調整が施され、内底面には成形時のユビオサエ痕跡が認められる。18は甕の胴部から底部にかけての破片である。底部には短い脚が取り付けられている。胴部は緩やかに内彎しながら上方に向かって立ち上がっており長い胴部形態である。内外面ともにナデ調整が施されている。出土した土器は弥生時代終末期から古墳時代初頭に位置付けられる。

土坑 63(第9図) 調査区北壁側西寄りで検出された。周溝状遺構 45 の北東隅角部分で切り合つており、本土坑が周溝状遺構 45 を切っている。平面形は不整楕円形で、断面形は中央部が一部掘り窪まって2段掘り状になっている。現存の規模は、長さ 0.78 m、幅 0.60 m、検出面からの深さは 0.20 m である。埋土は2層に分層でき、暗褐色の粘質土層は本遺跡で確認された弥生時代遺構と共通する。

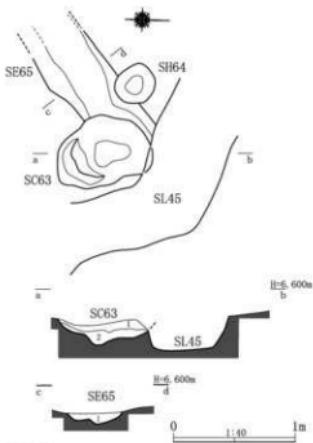
遺物はおもに1層から土器片が出土した。小片であり図示していないが、いずれも弥生土器の破片である。本土坑は埋土の特徴、周溝状遺構 45 との切り合い関係から少なくとも弥生時代後期以降のものであろう。

溝状遺構

溝状遺構 65(第9図) 周溝状遺構 45 北東隅角付近で検出された。北東—南西方向にのびる溝状遺構で、周溝状遺構 45、土坑 63、ピット 64 に切られている。南西側は途切れしており明確ではないが、溝状遺構 2 に切られていると考えられる。このような状況であるため、本来の長さなどは知らない。現状での長さは 1.2 m、幅は 0.4 m ほどである。断面形は浅い皿状で底面の一部に段が付いたような形状になっている部分がある。



第8図 土坑12、同出土遺物 (S=1:40, 1:3)

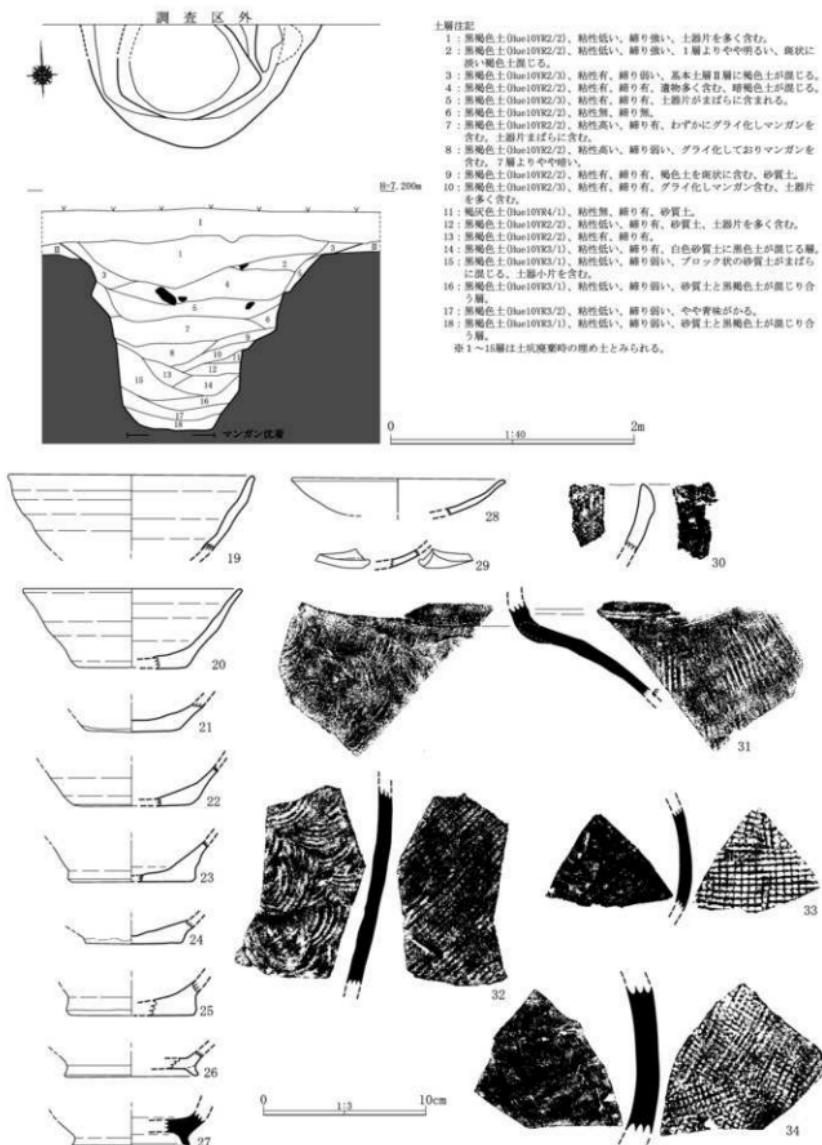
第9図 土坑63、溝状構造65、
ピット64 (S=1:40)

遺物は出土していないものの、周辺の遺構との切り合ひ関係や埋土の特徴から弥生時代の遺構であると判断した。

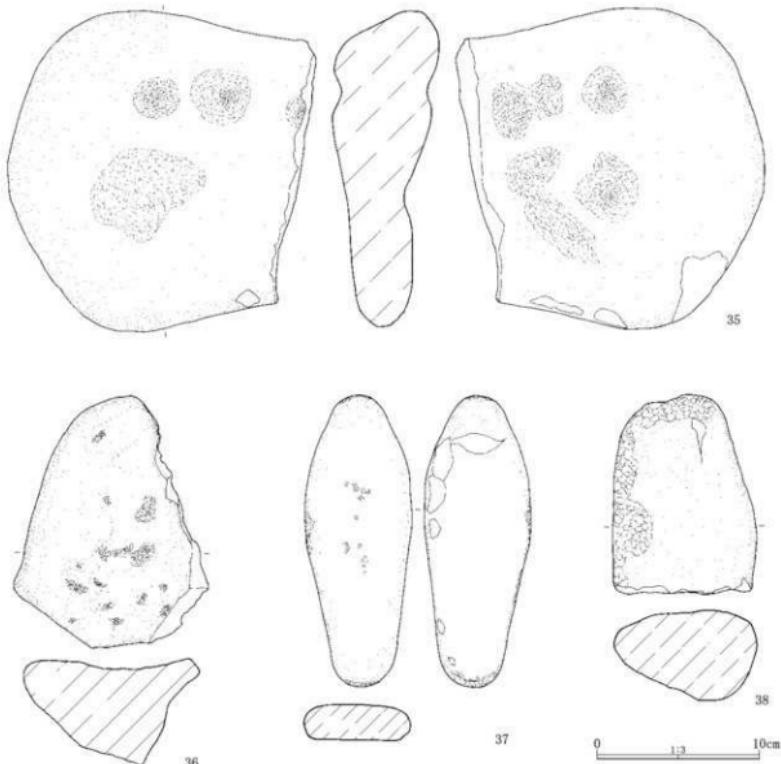
第3節 古代の遺構

土坑

土坑1 (第10、11図) 調査区中央北壁側で検出された。遺構の北半部は調査区外におよんでいたため全体形は知れない。検出部分から推測すれば平面形は不整円形と考えられる。断面形は二段掘り状になっていて、上部が逆ハの字形に開く形、下部はおおよそU字形である。東側の壁面には、階段状になっている部分があり、ステップとして利用されたものかと思われる。また、土層の堆積の状況から壁面が一部崩落したようにみえる部分がある (第10図、5層部分)。検出できた部分での規模は、長軸 (東西方向) で1.98 m、短軸 (南北方向) で1.00 m、検出面からの深さは1.62 mである。短軸方向の本来の規模は、北半が調査区外であるものの、おおよそ推測すれば1.50 mほどであろうかと思われる。



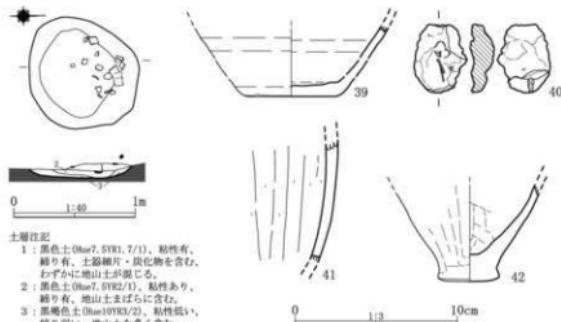
第10図 土坑1、同出土遺物 (S=1:40、1:3)



第11図 土坑1出土遺物 (S=1:3)

土坑の埋土は18層に分層することができた。底面に近い14、15層と16層との層界を境にして上位は堆積の単位が大きいことなどから、本土坑廃棄時の埋め立て土の可能性がある。また、中位にある4、5層中には土器片や石器など多くの遺物が含まれており、遺物の廃棄もおこなわれているものと考えられた。本土坑の性格については、井戸であったものと想定しておきたい。それは、土坑底面付近では湧水があり、調査中も常に水が沸いていたこと、さらに底面の地山層に鉄分の沈着が明瞭に認められたことによる。

19から25は土師器坏である。いずれもヘラ切底で底面はほぼ平坦である。底部と体部の接合部の厚みを増しているものが多く、23から25などは高台を意識したような底部形状になっている。体部から口縁部が残存しているのは19、20のみで、いずれもほぼ直線的に外方へ向かって立ち上がっており、口縁端部は19がわずかに内彎曲、20はわずかに外彎曲している。26、27は高台付坏である底部の破片で、高台は低く、外方に向かって広がっている。先端部は26では丸く



第12図 土坑49、同出土遺物 (S=1:40, 1:3)

塗土器である。口縁部付近の破片で外面には成形時のユビオサエ痕跡、内面には纖維圧痕跡(布痕)が認められる。31から34は須恵器甕である。31は頸部から胴部の破片で頸部と肩部の境界は屈曲がやや甘い。外面には平行タタキ目、内面には同心円状当具痕が認められる。32から34は胴部片である。32の外面には平行タタキ目、内面には同心円状当具痕が認められる。33、34の外面には格子目タタキ目が認められ、内面の当具痕跡はナデ消されている。35、36は砂岩製の台石である。35は一部が欠損している。全体に敲打痕跡があるが、大きく窪んでいる箇所が数箇所ある。また図上での上下側面は砥石として使用されていることが分かる。また、わずかに刃潰しのような線状痕もあり全体が被熱している。わずかに鉄錆の塊が付着している箇所がある。36も一部が欠損している。全体的に敲打痕が散見されるほか、表面の凹凸が著しい。全体が被熱しており、一部には黒化している箇所もある。また、破面を観察すると、図上での右側邊側破面はそのほかの破面と比べて摩滅していることから、この部分の欠損後も台石として使用されていたものとみられる。2点の台石は、その特徴から金属加工工具として使用されていたものと考えられる。37は砂岩製の砥石である。片面が完全に平滑になっている。また、側面には全体的に敲打痕があり上下端に顕著である。38は砂岩製の敲石である。図上での上端部および左側面に敲打痕が顕著である。また、裏面には円形で直径8mmほどの穴が認められる。出土した土器は形態的特徴から9世紀後半から10世紀前半にかけてのものである。遺構の廃棄にともなう埋め土からの出土であることから、これら土器の時期は本土坑の廃絶時期を示しているといえる。

土坑49(第12図) 調査区の北壁側東端付近で検出された。平面形は北東-南西方向に長い不整規円形で、断面形が浅い皿状の土坑である。規模は、長さ0.99m、幅0.87m、検出面からの深さは0.12mである。埋土は3層に分層できた。最上層の1層は黒色粘質土で、最下層の3層は地山の砂質土を主体とする層、中間の2層は上下の層が互いに混じりあったような土層であった。

遺物は、土坑内に散在する状況で出土した。その多くが1層出土で、2層からはわずかに出土したのみであった。3層からは遺物は検出されなかった。機能については、それを推定させるよ

り取られており、27では平坦面が形成されている。28は皿とみられる。口縁部から体部にかけての破片で口縁端部は外方に屈曲し丸く取められている。器表面には釉薬かと思われる光沢が認められる。灰釉陶器のように思われるが判然としない。29は緑釉陶器片である。内外面ともに釉薬がかけられている。胎土は灰色である。30は焼

うな遺構、遺物の特徴は見出すことができず、判然としない。

39は土師器壺である。底部片と体部片がある。底部は平坦で底部と体部との接合部は厚みを増さない。体部は直線的に外方に立ち上がってている。40は焼成粘土塊である。表裏面ともに織維状圧痕が認められる。41は甕である。体部片で内面には縦方向のケズリ調整が施されている。外面は風化しているが格子目状のタタキ目とハケ目が認められる。42は弥生土器である。甕の底部から胴部にかけての破片で小型の脚が取り付けられており脚底面は平坦である。胴部はわずかに内彎しながら外方へ広がっている。内外面ともにナデ調整が施されている。弥生時代後期後半から終末期に位置付けられる。本土坑の時期を示す遺物は39、40であろう。小片で明確でないものの土坑1と近しい年代であるかと思われる。

第4節 近世の遺構

土坑墓

土坑墓6（第13図）調査区中央やや東よりで検出された。平面形、断面形いずれも長方形で箱形の土坑墓である。底面は平坦で側壁はほぼ垂直に立ち上がっている。規模は、長さ1.30m、幅0.80m、検出面からの深さは0.86mである。土層は13層に分層できた。1層から3層、10層は棺腐朽、崩落によって流入した土層である。4層から9層は埋葬時の埋土、11、12層は棺痕跡より底面に水平に堆積していることから棺据え置きの際の敷き土の可能性がある。

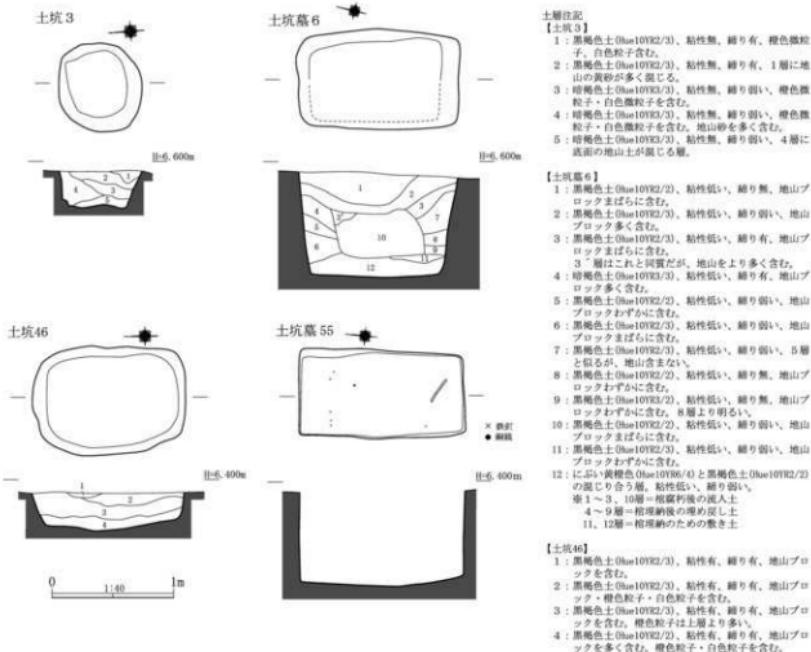
遺物は銅銭が出土した。銅銭は中央付近で出土し、床面上付近にあった。

土坑墓55（第13図）調査区中央付近で検出された。平面形、断面形いずれも長方形で箱形の土坑である。各辺はいずれも直線的で、側壁もほぼ垂直に立ち上がっている。規模は、長さ1.36m、幅0.74m、検出面からの深さは0.78mである。

底面直上から鉄釘、銅銭が出土した。釘1、釘2は土坑北側の東側、釘3から釘5は土坑北側の西側にまとまっており、釘6は土坑南側の西壁そばから出土している。銅銭は土坑中央からやや北寄りにあった。また、土坑南壁付近には人骨と思しきものが検出されたが、粘土化していたため取り上げることはできなかった。大きさからみて大腿骨かとも思われたが、判然としない。大腿骨であれば埋葬の頭位は北方向と想定される。

土坑墓7（第14図）調査区中央よりやや南側で検出された。平面形、断面形いずれも長方形で箱形の土坑墓である。底面は平坦で、側壁はほぼ垂直に立ち上がっている。南北方向に長く、規模は長さ1.36m、幅0.57m、検出面からの深さが1.25mである。南西の隅角を土坑墓8に切られている。土層は13層に分層できた。北壁の底面から側壁に沿って堆積する13層が棺据付後の埋め戻し土と考えられるほかは、いずれも棺の腐朽にともなう流入あるいは崩落土と考えられる。

床面付近からは、棺材の残欠と煙管、火打石、火打金、銅銭、鉄釘が出土した。棺材は棺の底板と考えられ、土坑の長軸方向に長い木材の破片である。棺の形態は不明であるが、残存する棺材の状況から後に記す土坑墓8と同様の形態であったと想定される。棺材と鉄釘以外の遺物は、埋葬時の副葬品と考えられる。いずれも副葬時の原位置を保っていると判断できる。特に喫煙具がセットになっている点が注目できる。床面付近では併せて人齒の細片が確認された。これらは土坑中央より北側にあったことから、埋葬時の頭位は北方向であったと判断できる。その場合、



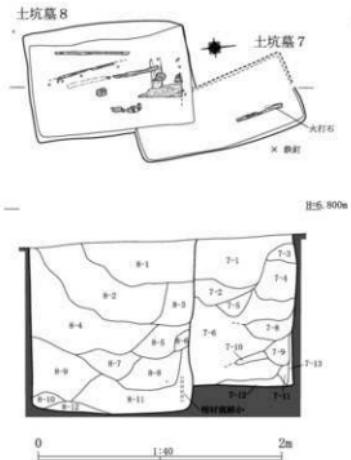
第13図 土坑3、46、土坑墓6、55(S=1:40)

上記喫煙具は被葬者の頭左侧に沿うように置かれていたことになる。

43は煙管の雁首である。銅ないし真鍮製と考えられる。首部の屈曲は弱く、火皿は小型であり両者の境界に補強体は認められない。小口には肩が作り出されない。吸口とつなぐ竹製と思しき吸管がわずかに残存している。44は煙管の吸口である。銅ないし真鍮製と考えられる。小口から口付まで直線的にすぼまっていく形態で小口には肩が作り出されない。側面には火打金が銛着している。煙管は形態的特徴から、19世紀代の製作と考えられる。45は火打石である。チャート製で、側縁部に使用痕跡が認められる。46は棺材で銅鏡が一枚挟まっていた。

土坑墓8（第14図） 調査区中央よりやや南側で検出された。土坑墓7と切り合っており、本遺構が土坑墓7の南西角付近を切っている。平面形、断面形いずれも長方形で箱形の土坑墓である。底面は平坦で側壁はほぼ垂直に立ち上がっている。規模は、長さ1.33m、幅0.92m、検出面からの深さは1.44mである。土層は12層に分層できた。いずれも棺の腐朽にともなう流入土あるいは崩落土であると考えられるが、そのうち、3層から8層は地山ブロックが多く含まれる特徴から棺据付後の埋め戻し土であったものと考えられる。

本土坑墓の床面付近からは、棺材の残欠および、鉄釘、銅錢が出土した。棺材はいずれも板状



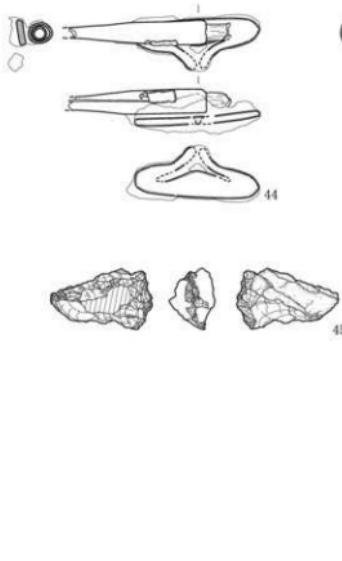
土層剖面記

土坑墓 7

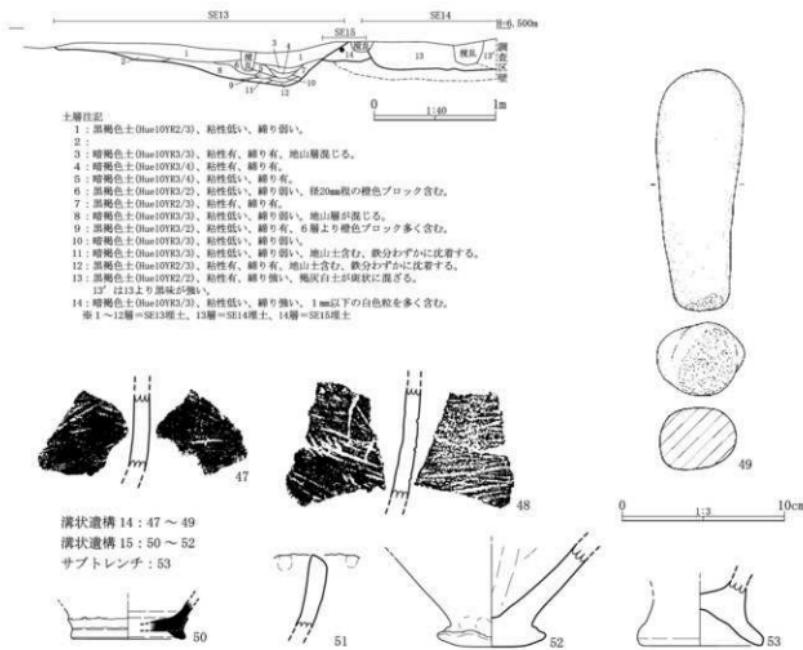
- 1: 黒褐色土 (Bue2.5Y3/2)。粘性有。縫り有。橙色微粒子や白色粒子を含む。地山ブロックを少く含む。
 - 2: 黒褐色土 (Bue2.5Y3/2)。粘性有。縫り有。1と同質で地山ブロックを多く含む。
 - 3: 棕褐色土 (Bue2.5Y3/3)。粘性無。縫り弱い。橙色粒子を多く含む。
 - 4: 黑褐色土 (Bue10Y3/2)。粘性弱。縫り弱い。橙色粒子と地山ブロックを多く含む。白色粒子を少く含む。
 - 5: 黑褐色土 (Bue2.5Y3/2)。粘性有。縫り有。1と同質土。
 - 6: 黑褐色土 (Bue2.5Y3/2)。粘性弱。縫り弱い。各地山や褐褐色土が混じり合い、それぞれの層を区別し難い。
 - 8: 棕褐色土 (Bue2.5Y3/3)。粘性無。縫り強。6より層厚ブロックの含有量多い。
 - 9: 黑褐色土 (Bue10Y2/2)。粘性強。縫り強。地山ブロックを多く含む。
 - 10: 黑褐色土 (Bue10Y2/2)。9と同質土だがやや弱い。
 - 11: 黑褐色土 (Bue10Y2/2)。粘性強。縫り強。地山ブロックを多く含む。
 - 12: 黑褐色土 (Bue10Y3/1)。粘性強。縫り強。棕褐色土と土坑底面の地山が混じり合う層。
 - 13: 黑褐色土 (Bue2.5Y3/2)。粘性強。縫り強。地山ブロックを多く含む。
- ※ 1~12=標準剖後の流入土、13=標準納時の埋め戻土

土坑墓 8

- 1: 黑褐色土 (Bue10Y3/3)。粘性弱。縫り有。地山ブロック、橙色微粒子、白色粒子を多く含む。
 - 2: 黑褐色土 (Bue10Y3/3)。1とはほぼ同質土だが地山ブロックの含有量が少ない。
 - 3: 棕褐色土 (Bue10Y3/3)。4とはほぼ同質土だが大きな地山ブロックを多く含む。
 - 4: にじみ黄褐色土 (Bue10Y4/4)。粘性強。縫り強。暗褐色と地山が混じり合う。地山ブロックを多く含む。
 - 5: 黑褐色土 (Bue10Y2/2)。粘性強。縫り弱。地山ブロックを含む。
 - 6: 黑褐色土 (Bue10Y2/2)。5とはほぼ同質土だが地山ブロックをほとんど含まない。
 - 7: にじみ黄褐色土 (Bue10Y4/4)。4とはほぼ同質土だが地山ブロックの含有量が少なくボロボロと崩れやすくなる。
 - 8: 黑褐色土 (Bue10Y2/2)。粘性強。縫り強。大きな地山ブロックを含む。
 - 9: 黑褐色土 (Bue10Y2/2)。5とはほぼ同質土だが地山ブロックを少く含む。
 - 10: 黑褐色土 (Bue10Y3/1)。粘性強。縫り強。橙色粒子を多く含む。
 - 11: 棕褐色土 (Bue10Y3/3)。粘性強。縫り強。地山ブロックをほとんど含まない。9層に類似。
 - 12: 黑褐色土 (Bue10Y2/2)。粘性強。縫り強。10層や11層と地山が混じり合う層。
- ※全て標準剖後の流入土



第14図 土坑墓7、8、同出土遺物 (S=1:40, 1:2)



第15図 溝状遺構 13、14、15 土層断面、同出土遺物 (S=1:40, 1:3)

の木材で、棺底部の材と小口の材が認められた。棺底部の材は土坑墓長軸方向に長いもの、土坑短軸方向に長いものがある。両者の位置関係は後者が前者の下位に位置していたことから、後者で前者を下支えするような構造であったものと考えられる。また、長軸方向に長い木材は、第14図46に2枚の板の合わせ目があることから少なくとも2枚以上の板材によって構成されていたことがわかる。46には小口の材も確認でき、棺底部の材の上に重ねて固定されていたことがわかる。これら棺材の周囲からは鉄釘が多く出土した。第14図に出土位置を示した鉄釘は、棺材との位置関係から原位置を保っていると考えられたものである。

以上から本土坑墓に埋納された棺は、長軸が土坑長軸に平行する木製で長方形の棺であり、床板は少なくとも2枚以上の長軸方向に長い木材とそれを下支えする短い横板で、小口は床板の上に置かれた2枚以上の板で構成されており、それぞれは鉄釘によって結合されていたものと考えられる。その規模は、原位置を保っているとみられる棺材や鉄釘の状況から、長さ1.0m以上、幅0.4m以上と想定できる。

土坑

土坑3（第13図）調査区中央付近で検出された。円形で小型の土坑であり、断面形は底面がおおむね平坦なU字形である。また、土坑46と同様に、壁面と底面の傾斜変換点付近には土坑掘削時の工具痕跡らしい凹凸が認められた。規模は、直径約0.68mで検出面からの深さは0.3mである。埋土は5層に分層できる。黒褐色ないし暗褐色の粘質土層で、近世の遺構と類似している。

遺物には銅鏡がある。銅鏡は最下層である5層とその上層の3層との境界付近から出土した。遺構底面から0.1mほど浮いた位置である。

本土坑は、出土遺物から近世に位置付けられる遺構であると判断できる。やや底面から浮いた位置ではあるものの銅鏡が出土していることなどから、近世の土坑墓であると考えられるもの明確でなく、土坑とした。

土坑46（第13図）調査区西壁側中央付近で検出された。平面形が南北方向に長い隅丸方形で、断面形は底面がおよそ平坦であるものの、凹凸が目立つ。壁面はU字形に立ち上がる形態である。また、壁面と底面との傾斜変換点付近には土坑掘削時の工具痕跡らしい凹凸が認められた。南西側の隅角を搅乱によりわずかに削平されている。規模は、長さ1.26m、幅1.0m、検出面からの深さは0.32mである。埋土は4層に分層できるものの、いずれも暗褐色粘質土で地山のブロックが含まれていた。

土坑内からは、洪武通宝が1点出土したほかは、この遺構とともにう可能性がある遺物は出土していない。本土坑は、埋土に地山ブロックや白色のスコリア状粒子が多く含まれており、近世墓と類似していることや形態的な類似性から近世の土坑墓である可能性が高いが明確で無く土坑とした。洪武通宝についても、その流通年代の問題や出土位置が明確でなく遺構に確實にともなうものか否かの判断が難しい。

溝状遺構

溝状遺構2（第3図）調査区中央よりやや西側で検出された。南北に直線的にのびる溝状遺構で、両端は調査区外におよんでいるため全体形を知れない。調査区内での長さは約10.3m、幅が約1.8mである。断面形は浅いU字形である。

埋土中からは近世陶磁器片が出土しており、近世段階の遺構であると考えられる。このほか、時期不明の敲石などが出土している（第16図66）。

溝状遺構13（第3、15図）調査区東端付近で検出された。検出時はL字状に屈曲する一連の溝状遺構として認識して掘削したが、掘削後に検出された底面形状や調査区東壁での土層の確認により、2条の溝状遺構が切り合っていたものと判断された。そのため、この2条の溝状遺構をここでは溝状遺構13-a、溝状遺構13-bと呼称することとし、あわせて報告する。

溝状遺構13-aは東西に長い溝状遺構で、調査区南壁中央付近から調査区東壁中央付近に向かってのびている。両端とも調査区外におよんでいるため、長さを含めて全体形を知れない。調査区内での長さは約15.8m、幅は最大で約3.4m、検出面からの深さは0.35mである。断面（第15図）は、不整形なV字形に近い形態で、側壁は、南側は傾斜角度が急で肩までの距離が短く、北側は傾斜角度が非常に緩やかで肩までの距離は長い。

溝状遺構 13-b は南北に長い溝状遺構で、東側の肩は調査区外にある。また、両端とも調査区外におよんでいる。したがって長さを含めて全体形を知れない。調査区内での幅は 2.2 m である。断面形は二段掘り状で、底面部分は U 字形である。

調査区東壁で土層を確認した結果、溝状遺構 13-a が 13-b を切っていることを確認できた。いずれからも近世陶磁器片が出土していることから近世段階の遺構であると考えられる。

溝状遺構 14 (第3、15図) 調査区南東端で検出された。東西方向にのびる溝状遺構で、溝状遺構 13-a に切られている。また南側の肩は調査区外におよんでいる。そのため全体形を知れない。断面形は U 字形である。検出部分での最大幅は約 1.1 m、検出面からの深さは 0.23 m である。

埋土中からは縄文土器片などが出土している (第15図 47、48) が、溝状遺構 13、15との切り合い関係から近世段階の遺構と判断できる。

溝状遺構 15 (第3図、15図) 調査区南東端で検出された。溝状遺構 13-a、溝状遺構 14 に切られていること調査区東壁より調査区外におよんでいることより、延長方向、幅などを含めて形態を知ることができない。第15図に断面の一部が確認できるが、これによると断面形は底面がおおむね平坦で側壁は緩やかに立ち上がる形態であろうと想定できる。検出面からの深さは約 0.15 m である。

埋土中から弥生土器片 (第15図 52)、古代土器片 (第15図 50、51) 近世陶磁器片が出土しており、溝状遺構は近世段階の遺構と判断できる。

溝状遺構 17 (第3図) 調査区中央北壁付近で検出された。南北にのびる溝状遺構で、調査区北壁より調査区外におよんでいる。そのため全体形を知れない。検出部分での長さは約 1.6 m、幅は約 0.7 m である。

埋土中から近世陶磁器が出土しており、近世段階の遺構であると判断できる。

溝状遺構 72 (第3図) 調査区東端付近で検出された。南北方向に直線的にのびる溝状遺構で、北端は調査区外におよび、南端は擾乱によって削平されている。そのため、全体形を知れない。現状で確認できる部分での長さは約 3.5 m、幅は約 1.6 m である。断面形は浅い U 字形である。

埋土中から近世陶磁器が出土しており、近世段階の遺構であると判断できる。このほか、弥生土器片、土錐、蔽石などが出土した (第16図 59、60、63、67)。

第5節 時期が不明確な遺構

溝状遺構

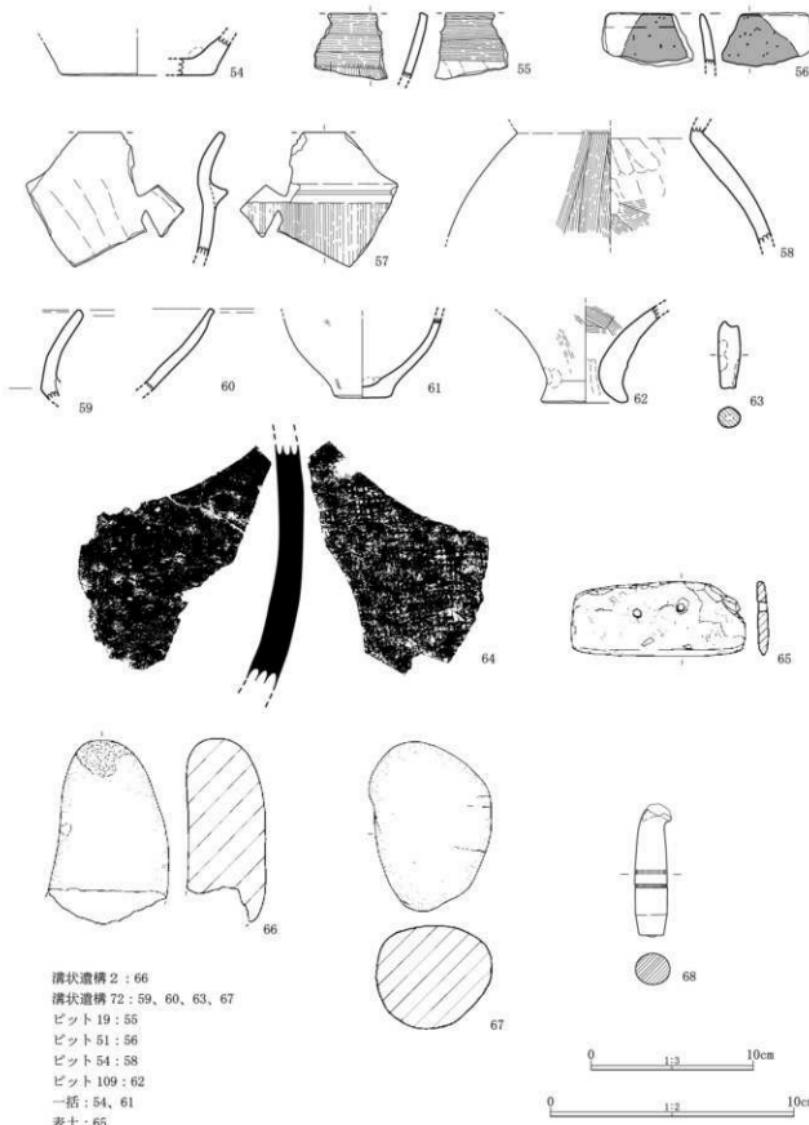
溝状遺構 18 (第3図) 調査区中央付近から東方向へのびる溝状遺構である。遺存状態が悪く底面付近のごく一部が残存しているに過ぎなかった。東端は溝状遺構 13-b に切られているが、おそらく調査区外までのびていたものと思われる。また、途中途切れている部分がある。検出部分での長さは約 18.7 m、幅は約 0.4 ~ 0.6 m である。

埋土中から弥生土器小片のほか、時期不明の土器小片が出土している。

ビット群 (第3図) 調査区中央寄り西側を中心に多くのビットを検出した。出土遺物および時期の明らかな他の遺構埋土との比較である程度時期を推定できるものも、いくつか存在する。弥生時代の遺構と推定できるものは周溝状遺構 45 周辺に多く、古代の遺構と推測できるものは調査区中央から東側に多い。その他の遺構の分布状況とおおむね一致している。

第6節 その他の遺物

上記以外の遺構や遺構外からも遺物が出土しているが、そのうちの一部を第16図に示した。54は繩文土器片である。鉢底部の小片で平底である。磨滅が著しい。55から62は弥生土器である。55は鉢ないし高杯で、緩やかに内彎し、口縁端部は平坦で内面側がわずかにつまみ出されている。内面にはハケ調整、外面には上部にハケ調整、下部にナデ調整が施されている。56は鉢あるいは塊である。口縁部片で、わずかに内彎し端部は丸く収まる形態である。一部は内外面ともに被熱により変色しており、胎土が発泡している箇所もある。被熱箇所とそうでない箇所との境界が比較的明瞭であり、偶然の被熱というより何らかの高温をともなう作業に用いられた土器であった可能性が考慮される。57は甕である。口縁部から胴部にかけての破片で、肩部付近に断面三角形の貼付突帯がある。口縁部は外方に向かって短く屈曲し胴部は肩部付近に最大径があるものと思われる。外面は突帯より下位にはハケ目調整が、上位にはナデ調整が施されている。内面にはナデ調整が施されている。58は壺である。頸部下端から胴部の破片で最大径が胴部中位付近にある球形に近い器形とみられる。頸部と肩部の境界は屈曲が強く明瞭である。外面にはハケ調整、内面にはハケ調整、ナデ調整が施されている。59は甕である。口縁部片で彎曲しながら外方に開いている。60は鉢とみられる。口縁部から胴部にかけての破片である。口縁端部付近は薄く仕上げられており、端部には平坦面が形成されている。61は小型の壺である。底部から胴部にかけての破片で平底の底部に丸みを帯びた胴部が続いている。器表面が風化しているが、外面にハケ目、内面底部にはユビオサエ痕跡が認められる。62は瓶である。底部付近の破片で、胴部から底部に向かってすぼまり、裾端部はわずかに外方へ開いている。蒸気孔はつつぬけ状である。内外面ともにハケ目、ユビオサエ痕跡が認められる。63は土鍤である。手捏ね成形でその際のユビオサエ痕跡が認められる。64は須恵器甕である。胴部片であり、外面には格子目タタキが認められる。内面の当具痕はナデ消されている。65は石包丁である。頁岩製で中央付近に着紐のための孔が横位2孔一組存在する。全体的に製作時のものと見られる擦痕が確認できる。66は敲石である。不整形の砂岩で、図での上端部に敲打痕が認められる。上面には磨面があり、砥石としても使用されている。67は敲石である。68は銃弾である。細長い形態で直径が12.7ミリである。



第16図 その他の出土遺物 (S=1:3、銃弾のみ S=1:2)

第1表 津和田第2遺跡出土遺物観察表1

高欄頁 表番号	番号	種別 器種	法値 cm () : 復元推定値	色調		施成	調査		出土 (上 : ■ 下 : ▲)					備考	実測 番号			
				外側	内面		外側	内面	A	B	C	D	E					
p.10 第4回	1	弥生土器 壺	(24.8) (6.2) 25.9	■ ■	■ ■	明褐色 T.5YR6/3	良好	板ナデ	ナデ	多	—	—	—	—	—	外面媒付有 45		
	2	弥生土器 壺	(7.5) — —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	58		
	4	弥生土器 壺	— — —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	64		
	5	弥生土器 壺	(17.0) — —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	51		
p.13 第6回	6	弥生土器 壺	— — —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	59		
	7	弥生土器 壺	— — —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	53		
	8	弥生土器 壺	(12.8) — —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	58		
	9	弥生土器 壺	— (6.6) — —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	23		
p.14 第7回	10	弥生土器 高台小器台	— — —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	52		
	13	弥生土器 壺	— 2.8 —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	4		
p.15 第8回	14	土師器 鉢	5.2 3.9 5.0	■ ■ ■	■ ■ ■	■ ■ ■	■ ■ ■	■ ■ ■	■ ■ ■	少	—	—	—	—	—	27		
	15	土師器 小物容器	— — —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	28		
	16	土師器 壺	— (6.0) — —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	36		
	17	土師器 壺	— 2.0 — —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	32		
p.16 第9回	18	土師器 壺	— (4.8) — —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	39		
	19	土師器 壺	(14.8) — —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	26		
	20	土師器 壺	(13.1) (6.4) —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	22		
	21	土師器 壺	— 5.8 — —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	24		
p.16 第10回	22	土師器 壺	— (6.4) — —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	19		
	23	土師器 壺	— (7.8) — —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	17		
	24	土師器 壺	— 6.0 — —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	29		
	25	土師器 壺	— (8.0) — —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	12		
p.16 第10回	26	土師器 高台付环	— (8.1) — —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	26		
	27	土師器 高台付环	— (7.2) — —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	25		
	28	灰輪陶器?	(12.6) — —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	18		
	29	綠釉陶器 壺	— — —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	35		
p.16 第10回	30	土師器 地盤土器	— — —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	21		
	31	單底器 壺	— — —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	16		
	32	單底器 壺	— — —	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	■ ■	少	—	—	—	—	—	19		

第2表 津和田第2遺跡出土遺物観察表2

通載頁 表番号	番号	種別 器種	法量 cm () : 変復推定値		色調		施成	調整		紳士 (上: mm 下: 線)					備考	実測 番号	
			口径	底径	器高	外面		外面	内面	A	B	C	D	E			
p.16 表10回	33	須恵器 盤	—	—	—	灰 55.0	灰白 N7.0	良好	格子目タキ	当其楕ナゲ消し	—	微少	—	—	1 個	—	11
	34	須恵器 盤	—	—	—	褐灰 10YR5/1	灰白 N7.0	良好	格子目タキ	当其楕ナゲ消し	—	1 個	3 個	—	1 個	—	15
p.18 表12回	39	土師器 环	—	6.0	—	褐 5YR6/6	に点々・褐 7.5YR5/4	良好	回転ナデ	回転ナデ	—	微少	—	—	—	ヘラ切底	34
	40	土製品 粘土地	4.2	3.2	1.5	に点々・赤褐 5YR5/4	に点々・赤褐 5YR5/3	良好	—	—	—	1 個	—	1 個	—	ワラ状織維板	37
	41	土師器 環	—	—	—	に点々・褐 7.5YR5/3	に点々・褐 7.5YR5/3	良好	ヨコハケ タタキ	タタキ	—	微少	—	—	—	—	46
	42	弥生土器 盤	—	3.8	—	に点々・黄褐 10YR6/4	褐灰 7.5YR5/3	良好	ナデ	ナデ	—	微少	—	—	—	底面ナデ	48
p.22 表15回	47	圓文土器 盤	—	—	—	明褐 7.5YR5/3	灰黄褐 10YR5/4	良好	条瓶文	条瓶文	—	1 少	—	—	—	—	62
	48	圓文土器 盤	—	—	—	に点々・黄褐 10YR5/4	明褐灰 7.5YR5/2	良好	条瓶文	ナデ	—	1 少	—	—	—	—	8
	50	須恵器 高台付环	—	(6.8)	—	褐灰 2.5YR5/1	褐灰 10YR4/1	良好	回転ナデ	回転ナデ	—	—	—	—	—	—	3
	51	土師器 陶土器	—	—	—	褐 5YR6/6	褐 2.5YR7/8	良好	風化不明	風化不明	—	2 個	—	—	—	内面織維板	13
p.26 表16回	52	弥生土器 盤	—	6.6	—	に点々・褐 7.5YR5/3	に点々・褐 7.5YR5/4	良好	ナデ ユビオサエ	ナデ ユビオサエ	—	2 多	—	—	—	—	9
	53	弥生土器 盤	—	7.8	—	褐 7.5YR4/1	明褐灰 7.5YR5/1	良好	ナデ	ナデ	—	1 少	2 個	—	—	摩滅気味	5
	54	圓文土器 盤	—	(9.0)	—	に点々・素褐 5YR5/4	黑褐 7.5YR5/1	良好	風化不明	ユビオサエ ナデ	—	2 少	多	—	—	—	2
	55	弥生土器 鉢小碗	—	—	—	褐 7.5YR6/6	に点々・黄褐 10YR6/4	良好	ヨコハケ ナデ	ヨコハケ タタキ	—	1 個	—	—	—	—	42
p.26 表16回	56	弥生土器 鉢小碗	—	—	—	に点々・褐 7.5YR6/4	に点々・褐 7.5YR5/3	良好	ナデ	ナデ	—	1 少	—	—	—	口縁部付近被 熱	49
	57	弥生土器 盤	—	—	—	明褐灰 5YR7/2	黄灰 7.5YR5/1	良好	ナデ ハケ日	ヨコナデ タタナデ	—	2 多	1 個	—	—	貼付支架	14
	58	弥生土器 盤	—	—	—	に点々・褐 7.5YR6/4	明褐灰 7.5YR7/1	良好	ハケ日	ナデ ハケ日	—	4 多	1 個	—	—	—	44
	59	弥生土器 盤	—	—	—	に点々・褐 7.5YR5/4	に点々・褐 7.5YR5/4	良好	ナデ	ナデ	—	2 少	2 少	—	—	—	30
p.26 表16回	60	弥生土器 鉢小	—	—	—	に点々・褐 7.5YR5/4	良好	丁寧なナデ	ナデ	—	—	—	—	—	—	—	31
	61	弥生土器 盤	—	3.0	—	に点々・褐 5YR5/4	に点々・褐 5YR5/4	良好	ハケ日 ナデ	丁寧なナデ	—	2 少	—	—	—	底面ナデ	60
	62	弥生土器 盤	—	4.9	—	に点々・褐 7.5YR5/4	に点々・褐 5YR5/4	良好	ハケ日 ナデ	ハケ日 ユビオサエ	—	4 多	1 個	—	—	底面に煤付着	38
	63	土製品 土器	4.1	1.3	1.3	に点々・褐 5YR7/4	—	良好	ユビオサエ	—	—	—	—	—	—	—	41
p.16 表16回	64	須恵器 盤	—	—	—	褐灰 10YR5/1	明褐灰 5YR7/1	良好	ナデ 格子目タキ	当其楕ナゲ消し	—	—	—	—	1 多	—	6

第3表 津和田第2遺跡出土遺物観察表3

出典頁 図番号	番号	器種	材質	法量 cm () : 深元推定値			備考	実測 番号
				長さ	幅	厚さ		
p.10 第4圖	3	鐵石	砂岩	9.8	3.2	2.0	鐵打瓶跡	56
p.13 第6圖	11	鐵石	砂岩	8.0	2.3	0.6	片面が平坦になっている	43
	12	鐵石	砂岩	(9.5)	7.3	2.2	鐵打瓶跡頗著	48
p.17 第11圖	35	古石	砂岩	19.8	(16.9)	6.7	被熱により赤変箇所所有、鐵石として併用(磨面有)	66
	36	古石	砂岩	(15.5)	(11.9)	(6.6)	被熱により赤変箇所所有	61
	37	鐵石・鐵石	砂岩	17.9	6.6	2.2	表面に磨面、鐵打瓶跡は側縁に頗著	63
	38	鐵石	砂岩	(12.3)	(9.0)	5.5	側面に鐵打瓶跡頗著	54
p.21 第14圖	43	錫管原首	真鍮	(6.6)	1.1	1.8	吸管わずかに残存	
	44	錫管吸口	真鍮	(6.5)	1.1	1.0	側面に火打金が銷着、吸管わずかに残存	
	44	火打金	鉄	5.1	2.1	0.3	錫管吸口に銷着	
	45	火打石	チャート	2.4	4.2	1.9	側縁に使用痕跡	
	46	稻材	木	(9.2)	(6.8)	(3.8)	底板と側板	
p.22 第15圖	49	鐵石	砂岩	14.8	5.4	4.5	下端に鐵打瓶跡頗著	47
p.26 第16圖	65	石臼丁	頁岩	3.4	8.0	0.5		57
	66	鐵石・鐵石	砂岩	(11.3)	7.4	4.9	上端に鐵打瓶跡、上面に磨面、下面は黒化している	55
	67	鐵石	尾鈎山酸性岩	10.4	7.5	6.3	表面に鉛付着	65
	68	真鍮	銅彈					

第4表 津和田第2遺跡出土遺物観察表4

番号	種類	材質	部位	法寸(cm)		現存範	備考
				長さ	幅		
1	鉄釘	鉄	頭部	(2.8)	1.1	0.8	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目は上端が横方向。下端が縦方向。
2	鉄釘	鉄	頭部	(1.5)	0.9	0.6	鉄釘が付着。木目は横方向。
3	鉄釘	鉄	頭部	(1.2)	0.6	0.4	鉄釘が付着。木目は横方向。
4	鉄釘	鉄	頭部	(2.4)	0.7	0.6	鉄釘が付着。木目は横方向。
5	鉄釘	鉄	先形	3.5	0.8	0.8	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。頭部は耳か舌状。
6	鉄釘	鉄	頭・頭部	(2.5)	1.1	1.4	鉄釘が付着。木目は横方向。頭部が他の個体と比較して細い。
7	鉄釘	鉄	頭部	(2.1)	0.8	0.5	鉄釘が付着。木目は横方向。頭部が他の個体と比較して細い。
8	—	—	—	1.2	1.0	0.4	鉄材片。
9	—	—	—	1.6	1.1	0.5	鉄材片。
10	鉄釘	鉄	頭部	(0.7)	0.6	0.3	鉄釘が付着。頭部小片。
11	鉄釘	鉄	頭・頭部	(2.4)	1.0	0.8	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
12	鉄釘	鉄	頭部	(0.5)	1.9	0.5	鉄釘が付着。木目は横方向。頭部は端部片。
13	鉄釘	鉄	頭・頭部	(3.3)	1.2	0.8	鉄釘が付着。木目は横方向。頭部は頭部の幅広い面の向きが他と異なり直交方向。
14	鉄釘	鉄	頭・頭部	(1.4)	1.0	0.6	鉄釘が付着。木目は横方向。
15	鉄釘	鉄	頭・頭部	(2.2)	0.8	1.8	鉄釘が付着。木目は横方向。
16	鉄釘	鉄	頭・頭部	(2.8)	1.2	0.8	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目は横方向。
17	鉄釘	鉄	頭・頭部	(2.4)	1.0	1.4	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
18	鉄釘	鉄	頭・頭部	(2.2)	1.3	0.9	鉄釘が付着。木目は横方向。
19	鉄釘	鉄	先形	2.3	0.9	0.7	鉄釘が付着。土台としておいて並んで付着する鉄釘は2枚とみられる。木目は1枚は横方向とわかる。
20	鉄釘	鉄	頭部	(3.7)	1.2	0.9	鉄釘が付着。土台としておいて並んで付着する鉄釘は2枚とみられる。木目は1枚は横方向とわかる。
21	鉄釘	鉄	頭・頭部	(2.0)	1.1	0.9	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
22	鉄釘	鉄	頭部	(3.9)	1.0	1.1	土台に付着材付着。
23	鉄釘	鉄	頭・頭部	(3.0)	1.0	0.8	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
24	鉄釘	鉄	頭・頭部	(1.4)	0.9	0.6	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
25	—	—	—	(0.6)	1.8	0.6	鉄材片。
26	鉄釘	鉄	頭部	(1.6)	1.0	0.4	鉄釘が付着。木目は横方向。
27	鉄釘	鉄	頭・頭部	(2.6)	0.8	0.6	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
28	鉄釘	鉄	頭・頭部	(2.8)	0.9	0.8	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
29	鉄釘	鉄	頭・頭部	(3.0)	1.4	0.8	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
30	鉄釘	鉄	頭・頭部	(1.6)	1.0	0.5	鉄釘が付着。木目は横方向。
31	鉄釘	鉄	頭・頭部	(1.5)	0.9	0.7	鉄釘が付着。木目は横方向。
32	鉄釘	鉄	頭部	(1.6)	0.7	0.4	鉄釘が付着。木目は横方向。
33	鉄釘	鉄	頭部	(1.8)	0.7	0.6	鉄釘が付着。木目は横方向。
34	鉄釘	鉄	頭・頭部	(1.7)	1.5	1.3	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
35	鉄釘	鉄	頭部	(1.3)	1.5	0.6	鉄釘が付着。木目は横方向。頭部は存在する可能性あるが相手で不明確。
36	鉄釘	鉄	頭部	(2.7)	1.0	0.6	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
37	鉄釘	鉄	頭部	(2.7)	1.4	0.6	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
38	鉄釘	鉄	頭部	(3.0)	1.0	0.8	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
39	鉄釘	鉄	頭部	(1.3)	0.8	0.5	鉄釘が付着。木目は横方向。
40	鉄釘	鉄	頭部	(3.5)	1.0	0.6	鉄釘が付着。木目は横方向。
41	鉄釘	鉄	頭・頭部	(1.6)	1.2	1.0	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
42	鉄釘	鉄	頭・頭部	(4.4)	0.9	1.1	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
43	鉄釘	鉄	下端部	(0.9)	1.9	0.5	下端部片。鉄釘が付着。木目は横方向。
44	鉄釘	鉄	頭部	(1.8)	2.0	0.8	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が平行。
45	鉄釘	鉄	頭部	(2.3)	0.9	0.5	鉄釘が付着。木目は横方向。下端部生存。
46	鉄釘	鉄	頭部	(1.5)	1.3	0.5	鉄釘が付着。木目は横方向。下端部生存。
47	鉄釘	鉄	頭・頭部	(2.8)	0.9	0.7	土化した鉄釘付着。
48	鉄釘	鉄	頭部	(1.7)	1.2	0.6	鉄釘が付着。木目は横方向。
49	鉄釘	鉄	頭・頭部	(1.5)	2.4	1.0	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
50	鉄釘	鉄	頭・頭部	(2.1)	1.6	1.6	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
51	鉄釘	鉄	先形	2.7	1.2	0.8	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
52	鉄釘	鉄	頭・頭部	(1.6)	1.5	1.8	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
53	鉄釘	鉄	先形	4.3	1.4	0.8	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
54	鉄釘	鉄	頭部	(2.0)	(2.1)	1.2	2枚の鉄釘が頭部を交差するように接着。ただし使用状況を保っているかは不明。
55	鉄釘	鉄	頭部	(2.9)	1.0	0.7	鉄釘が付着。木目は横方向。
56	鉄釘	鉄	頭部	(0.8)	1.1	0.5	鉄釘が付着。木目は横方向。
57	鉄釘	鉄	先形	2.5	1.2	1.4	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
58	鉄釘	鉄	頭部	(3.1)	0.8	0.9	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。下端部生存。
59	鉄釘	鉄	頭部	(2.8)	1.0	0.6	鉄釘が付着。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。下端部生存。
60	鉄釘	鉄	頭部	(2.3)	1.0	0.7	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
61	鉄釘	鉄	頭・頭部	(2.7)	0.9	0.3	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
62	鉄釘	鉄	頭・頭部	(2.5)	0.8	0.9	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
63	鉄釘	鉄	頭・頭部	(2.6)	1.3	1.4	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
64	鉄釘	鉄	頭・頭部	(1.7)	1.0	1.3	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
65	—	—	—	(2.1)	0.8	1.9	鉄釘小片。
66	鉄釘	鉄	頭部	(0.8)	2.2	0.6	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
67	鉄釘	鉄	頭・頭部	(1.8)	1.0	1.2	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
68	鉄釘	鉄	頭部	(1.7)	1.1	0.9	鉄釘が付着。木目は横方向。下端部生存してる可能性有。
69	鉄釘	鉄	頭・頭部	(0.6)	2.2	0.5	鉄釘が付着。木目は横方向。
70	鉄釘	鉄	頭・頭部	(1.2)	1.4	0.7	鉄釘が付着。木目は横方向。
71	鉄釘	鉄	頭・頭部	(1.8)	1.0	1.7	鉄釘が付着。2枚の木釘。木目はいずれも横方向だが、木目方向が直交。
72	鉄釘	鉄	頭・頭部	(1.2)	1.1	0.4	鉄釘が付着。木目は横方向。
73	鉄釘	鉄	頭部	(1.7)	0.7	0.3	鉄釘が付着。木目は横方向。
74	鉄釘	鉄	頭部	(1.3)	1.3	0.7	鉄釘が付着。木目は横方向。
1	鋼鉄	鋼	—	2.5	2.5	0.1	丸太通室。
2	鋼鉄	鋼	—	2.5	2.5	0.1	丸太通室。
3	鋼鉄	鋼	—	2.5	2.5	0.1	丸太通室。
4	鋼鉄	鋼	—	2.5	2.5	0.1	丸太通室。
5	鋼鉄	鋼	—	2.5	2.5	0.1	丸太通室。
6	鋼鉄	鋼	—	2.5	2.5	0.1	丸太通室。
7	鋼鉄	鋼	—	2.4	2.4	0.1	鍛錬小形。文のある面は平鍛錬面と不満に有機質付着。
8	鋼鉄	鋼	—	2.3	2.3	0.5	鍛錬小形。全面に有機質付着。
9	鋼鉄	鋼	—	2.4	2.4	0.4	鍛錬小形。
10	鋼鉄	鋼	—	3.4	3.3	1.3	鍛錬小形。頭部と側面に有機質付着。
11	鋼鉄	鋼	—	3.0	3.1	2.1	鍛錬小形。6枚の鋼鉄小球付着。有機質付着。
12	鋼鉄	鋼	—	3.1	3.8	2.5	鍛錬小形。少くとも3枚以上が接着。下面に相手が付着。

第IV章 まとめ

今回の調査では、縄文時代中期および後期の縄文土器片が出土した。津和田第2遺跡は宮崎平野南部の海岸沿いに形成された砂丘状微高地の上に立地する。宮崎平野南部で同様の立地環境に位置する縄文時代遺跡には、青島周辺の松添遺跡、右葛ヶ迫遺跡、納屋向遺跡や、一つ瀬川下流域にある桶ノ口遺跡がある。

これらの遺跡の共通点として、丘陵に近いあるいは丘陵直下付近にある微高地上に立地することと、遺跡の中心となる時期が縄文時代中期後葉以降であることがあげられる。遺跡の立地する微高地は、縄文時代中期の海退によって陸地化した地域にあたるものと考えられるが、上記のような遺跡の分布状況には、こうした土地を新たな生活域として選択した人々の動きを見出すことができる。松添遺跡からは、海棲動物や陸棲動物のいずれもが出土していることから、海、山いずれにも近く、多くの資源を獲得できる環境が生活適地として利用されたのであろう。

弥生時代から古墳時代の遺構は竪穴建物、周溝状遺構、土坑、ピットが確認された。津和田第2遺跡で確認された当該時期の遺構はおおむね弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけてのものと考えられる。近隣では赤江飛行場（現宮崎ブーゲンビリア空港）建設の際に同時期の遺物が多く採集されていることから、周辺に広がる砂丘状地形上一帯には人々の生活域が存在していたものと想定されていたものの、その様相が明らかでなかった。今回調査で明確な遺構が確認されたことは、当時の様相の一端を知るための成果と言えるであろう。砂丘状地形や、その周辺に複数の周溝状遺構が存在する状況は、宮崎市域では花ヶ島町の桜町遺跡、阿波岐原町の中須遺跡と類似する。大淀川を挟んだ南北で同様の環境下に様相の似た生活域、集落域が展開していたものとみられる。

古代の遺構は井戸とみられる土坑1、用途不明の土坑49の2基の土坑が確認された。そのほかにも、埋土の特徴から古代に属するとみられるピットも散見される。出土遺物から、およそ9世紀後半～10世紀前半に位置付けられる遺構と思われる。井戸の存在から周辺に当該時期の生活域が広がっていたものと想定できるものの、その様相については明確ではない。ただし、土坑1から金属加工工具とみられる石器が出土しており、金属製品生産が近隣でおこなわれていたものと考えられる。また、縁釉陶器や灰釉陶器と思しき土器片が出土していること、大淀川河口に近い八重川に面した砂丘状地形上という立地から、広域交流に関わる集団が存在していた可能性も考慮しておく必要がある。大正年間の新聞には津和田において多くの輸入陶磁片が採集されているとの記事もある。

近世の遺構については6条の溝状遺構と4基の土坑墓、2基の土坑が確認された。まとまった数の土坑墓が存在することから、近世においては当地が墓域として利用されていたと考えられる。

4基確認された土坑墓は、形態的にいずれも平面長方形で箱型のもの（土坑墓6、7、8、55）、土坑墓の可能性がある土坑は、隅丸長方形のもの（土坑墓46）、小型で平面円形のもの（土坑墓3）に分けられた。

土坑墓7、8については、木棺材の一部が残存しており、木棺の形態についてわずかながら知見を得ることができた。そのほか、土坑墓7で検出された煙管、火打金、火打石からなる喫煙具一式が注目できる。喫煙具一式が近世墓から検出された事例は、現在のところ本県では本例が唯一

一であり、当時の喫煙具の組み合わせや、副葬品の組成を知る上で重要である。喫煙具は煙管の形態から19世紀代の所産と考えられる。

また、今回調査では、1発の銃弾が検出された。銃弾の口径が12.7mmであることから、第2次世界大戦中の米軍の空襲によるものとみられる。第二次世界大戦当時、調査地周辺には赤江飛行場（現宮崎ブーゲンビリア空港）、戦闘機を格納する掩体壕、第931設営部隊兵舎、呉海軍施設部事務所などの軍関連施設が存在していたことから、周辺は度重なる空襲にさらされている。今回検出された銃弾もそのいずれかの際に放たれた可能性が高いものだろう。まさに今回調査地が空襲被害を受けたことを示す物証の一つである。

参考文献

- 「赤江　あの日あの頃」編集委員会編 2010『赤江　あの日あの頃』赤江ふるさと塾
石川恒太郎編 1964『赤江郷土史』赤江振興会
江戸遺跡研究会編 2001『図説　江戸考古学研究事典』柏書房
宮崎県編 1993『宮崎県史　考古1』宮崎県
宮崎県編 2000『宮崎県史　通史編　近・現代2』宮崎県
宮崎市教育委員会編 2014『下鶴遺跡』宮崎市文化財調査報告第101集 宮崎市教育委員会
坂上康俊ほか 1999『宮崎県の歴史』山川出版社



調査区全景(南西)から



調査区全景(北西)から



上：竪穴建物16、周溝状遺構48検出状況(南から)

下左：竪穴建物16遺物検出状況(東から)

下右：竪穴建物16出土遺物



上:周溝状造構45完掘状況
(南西から)

中:同断面a-b 土層堆積状況
(北から)

下左:同断面A-B 土層堆積状況
(東から)

下右:同断面C-D 土層堆積状況
(南から)



上：周溝狀遺構45出土土器

下：同出土石器





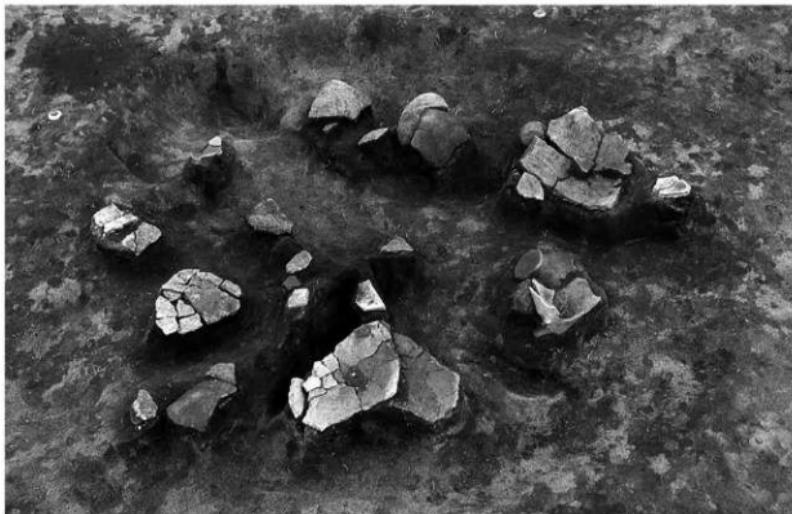
上:周溝状遺構59完掘状況

(南西から)

中:同検出状況(南東から)

下:同土層堆積状況(西から)





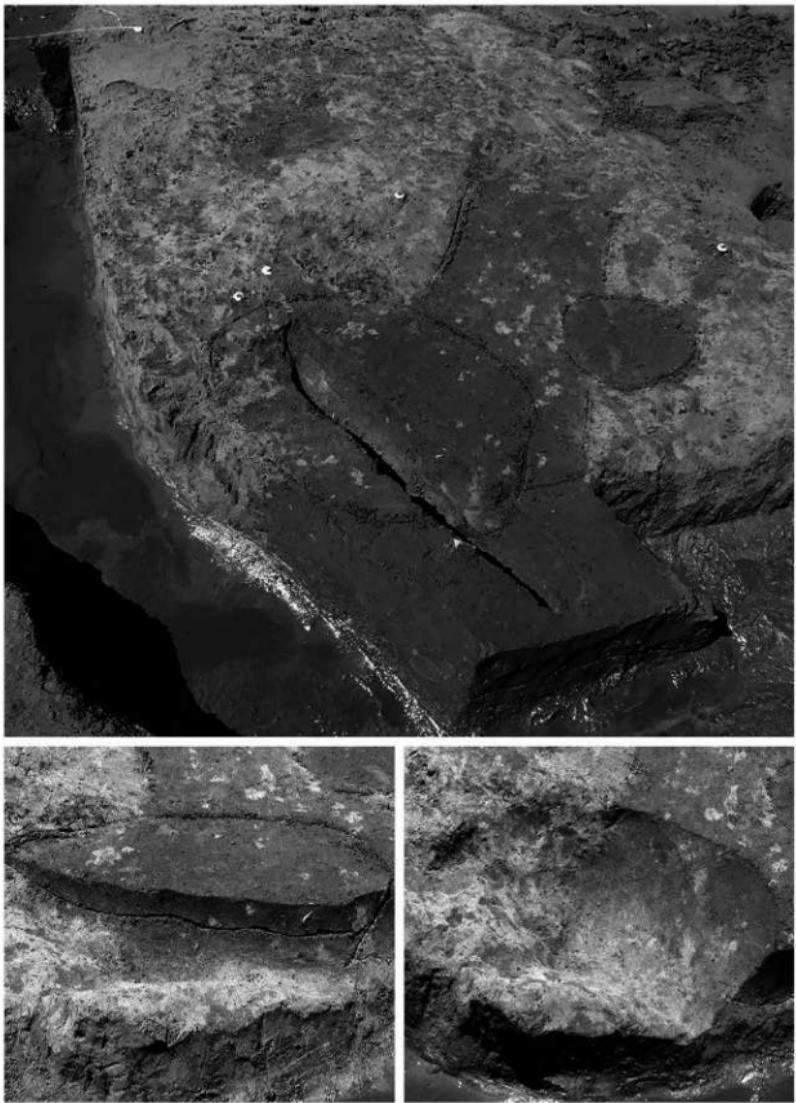
上: 土坑12遺物出土状況(南から)

下左上: 同遺物出土状況(北から)

下左下: 同出土土器 1

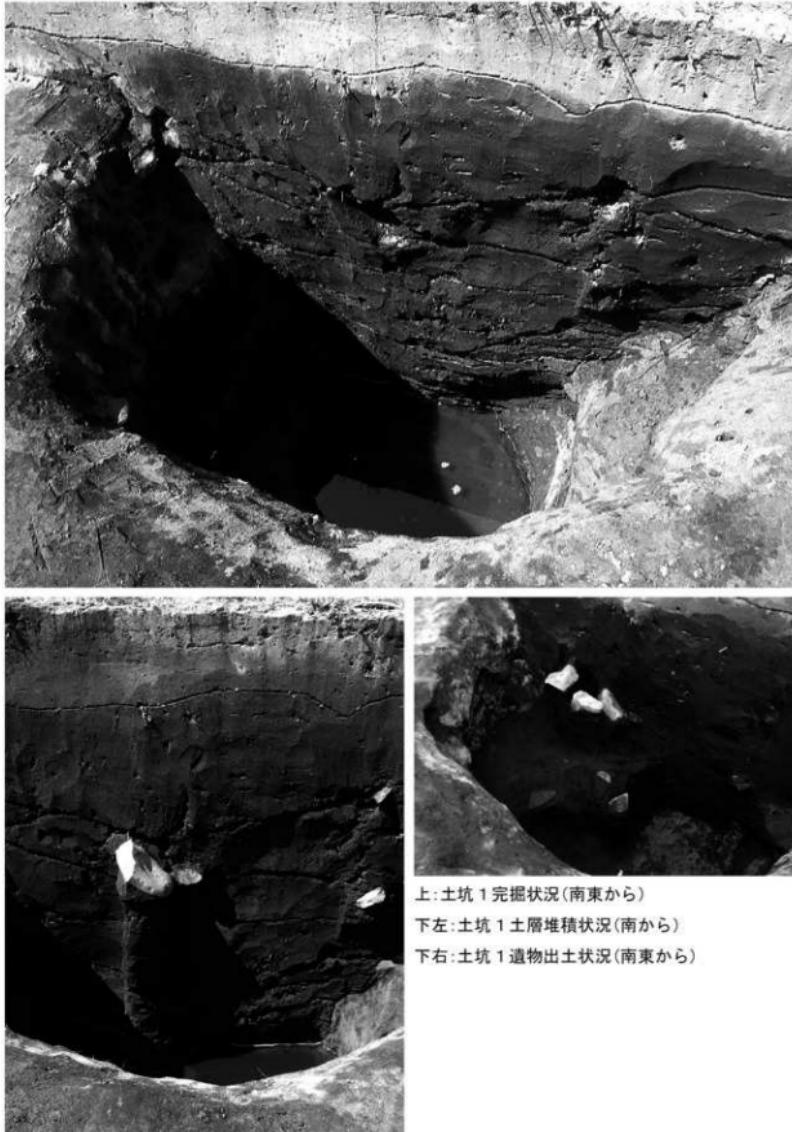
下右: 同出土土器 2





上:土坑63、ビット64、溝状遺構65検出状況(東から)

下左:土坑63土層堆積状況(東から)、下右:土坑63完掘状況(東から)



上:土坑 1 完掘状況(南東から)

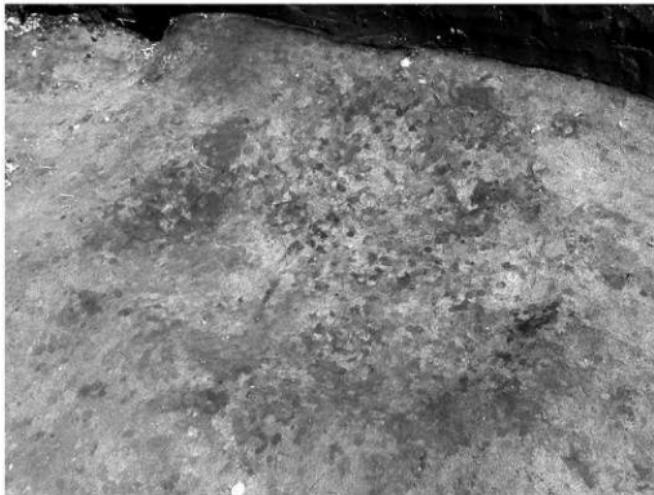
下左:土坑 1 土層堆積状況(南から)

下右:土坑 1 遺物出土状況(南東から)

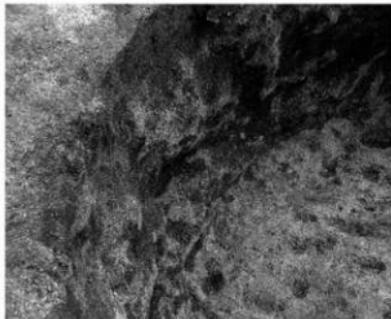
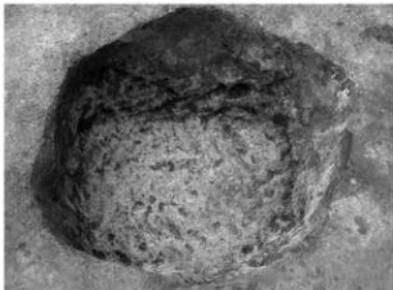


上:土坑 1 出土土師器、中左:同綠釉陶器、中右:同灰釉陶器

下:同石器



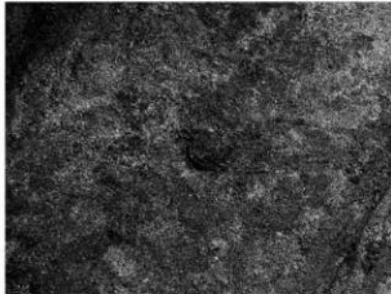
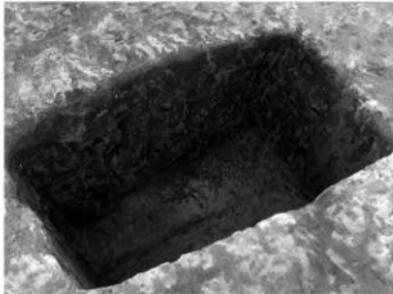
上:土坑49完掘状況(南東から)、中:同土層堆積状況(東から)、下:同出土遺物



左上:土坑 3 完掘状況(北から)

左下:土坑 3 土層堆積状況(南から)

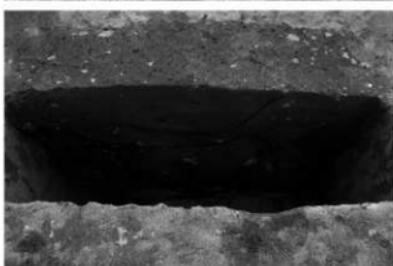
右:壁面に残る掘削痕跡(西から)



左上:土坑墓 6 完掘状況(西から)

左下:同土層堆積状況(南西から)

右:同銅鏡出土状況(西から)





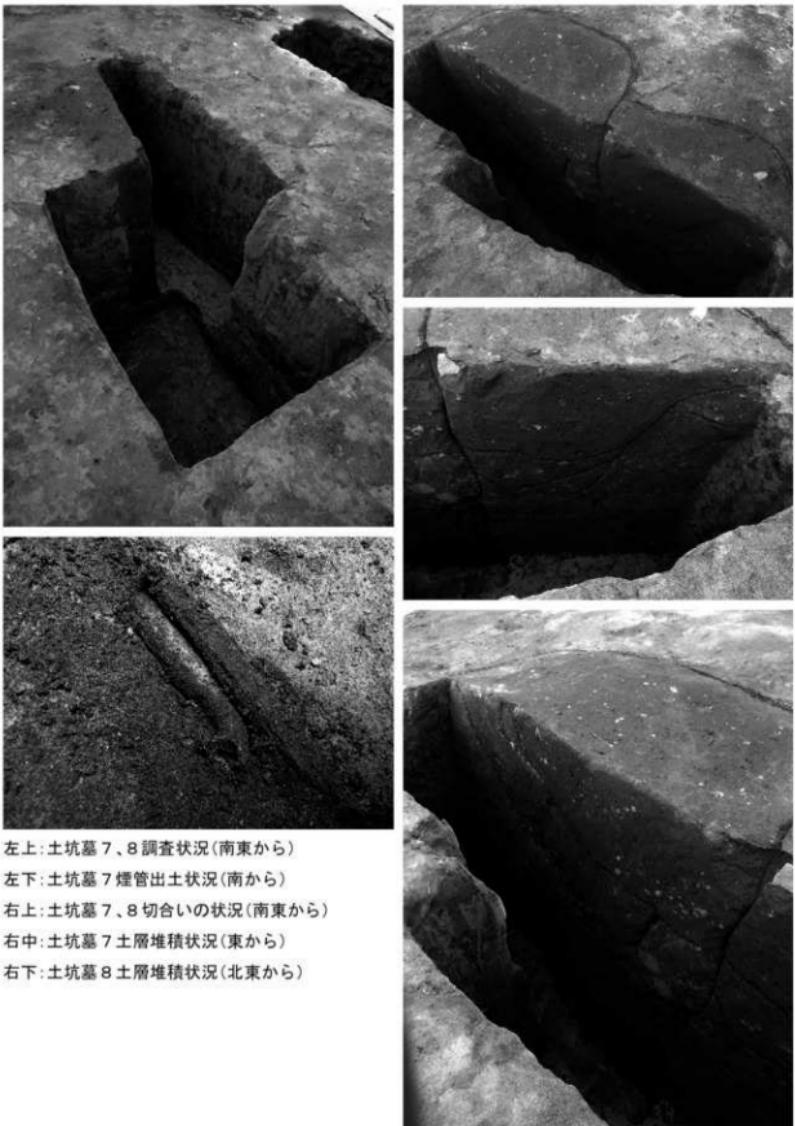
左:土坑墓46完掘状況(北から)

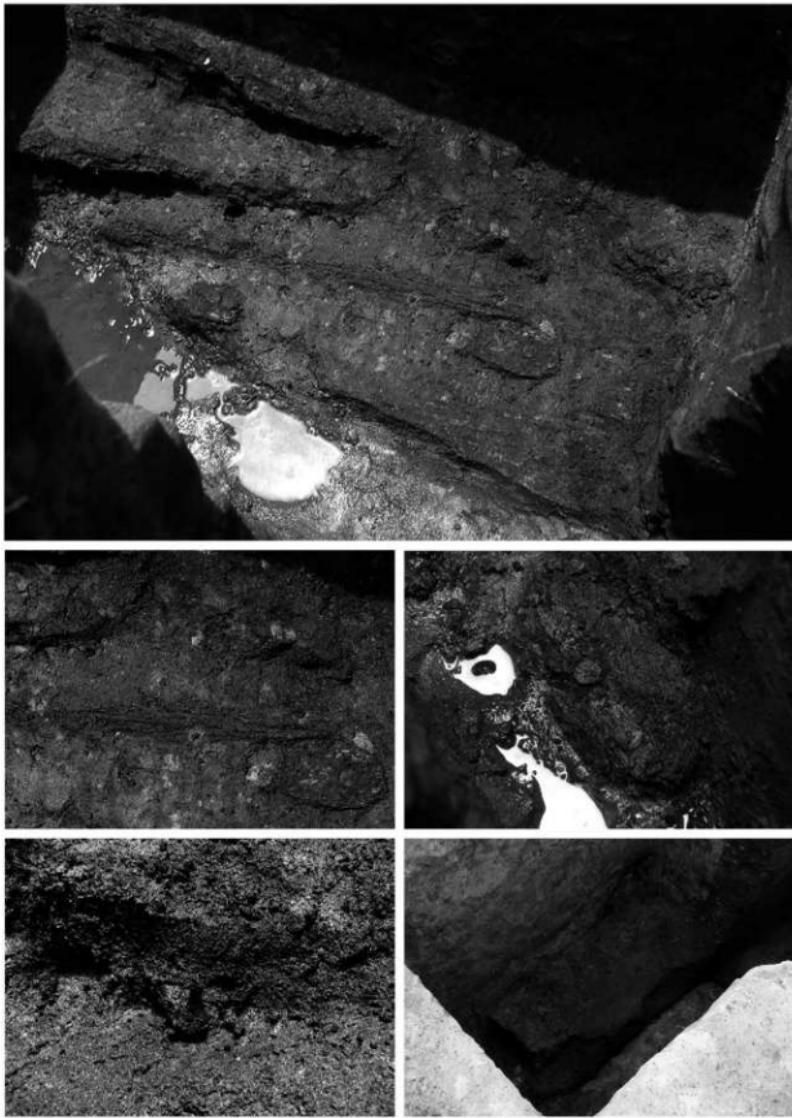
右:同土層堆積状況(北東から)



左:土坑墓55完掘状況(南から)

右:同(南西から)

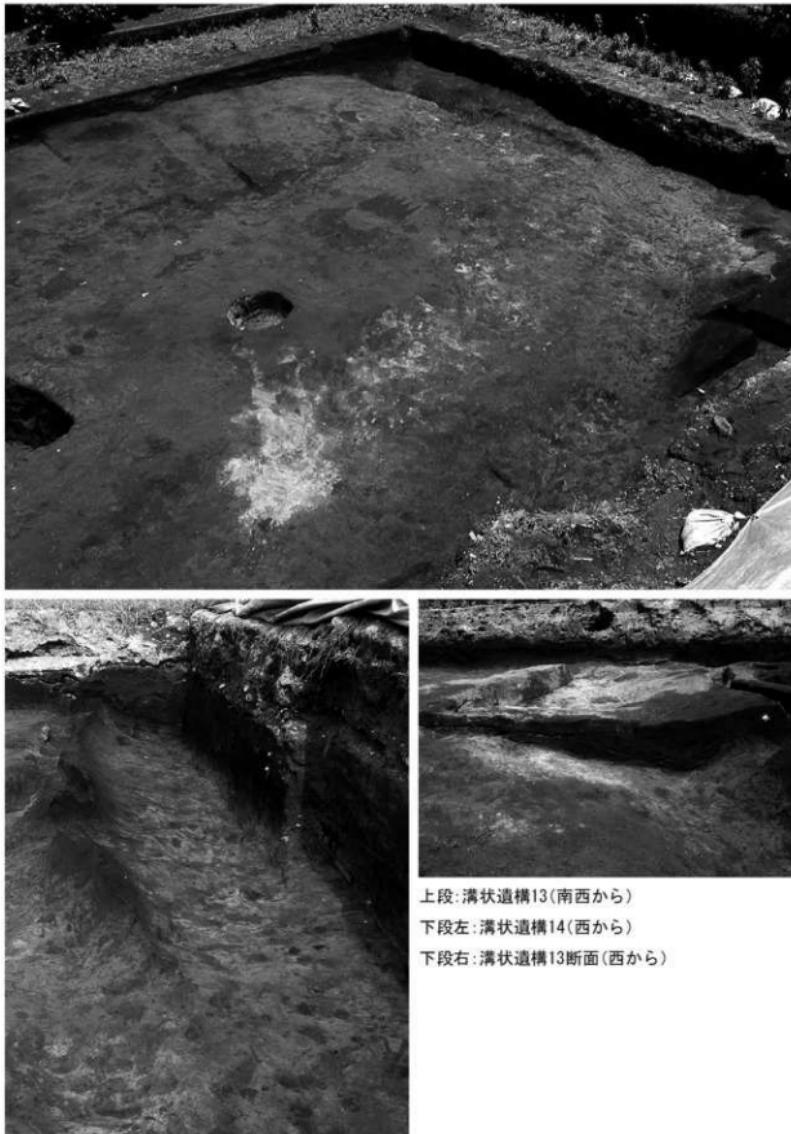




上: 土坑墓 8 棺材検出状況 1 (北東から)、中左: 同 2 (東から)、中右: 同 3 (北から)

下左: 同棺釘検出状況 (北東から)、下右: 同棺痕跡検出状況 (南東から)

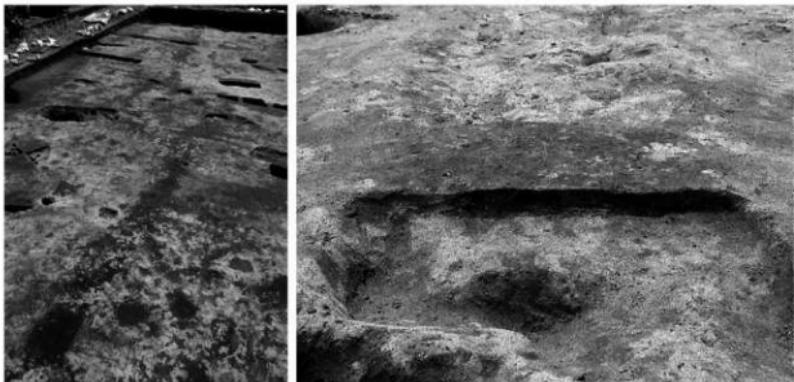




上段:溝状遺構13(南西から)

下段左:溝状遺構14(西から)

下段右:溝状遺構13断面(西から)



左:溝状遺構18検出状況(西から)、右、溝状遺構土層堆積状況(東から)



上左:出土縄文土器外面、上右:同内面、下:溝状遺構出土遺物



上段:その他出土遺物、下段左:ピット51出土被熱弥生土器、下段右:銃弾

第II部 竹ヶ島第2遺跡

第1章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境

竹ヶ島第2遺跡は宮崎県宮崎市佐土原町下那珂字竹ヶ島に所在する。宮崎市は、九州島東南部にある宮崎平野の南半を占めており、河川流域でいえば大淀川下流域に位置する。市域は北を一つ瀬川、南は鰐塚山地、東は日向灘、西を九州山地の一部を限りとする。地形は、山地から派生する丘陵、台地状の地形や段丘面、河川の作用によって形成された沖積地、海岸線にのびる4本の砂丘列と、その後背湿地で形成され、地区ごとに多様な地形、地質がみられる。また、市域には幾筋もの河川が流れているが、大淀川、石崎川、清武川などが主要な河川である。

竹ヶ島第2遺跡は、このうち石崎川下流域右岸の河口から約1.5kmの位置にある。上記の4本の砂丘列のうち、もっとも内陸側の第1砂丘上にあり、かつ石崎川を望む突端付近に位置している。遺跡付近の標高は約10mである。

第2節 歴史的環境

竹ヶ島第2遺跡周辺では多くの遺跡が確認されている。砂丘地形周辺では旧石器時代、縄文時代に遡る確実な遺跡はこれまで確認されていない。石崎川対岸の丘陵上にある下那珂遺跡でナイフ形石器や細石刃核、集石遺構、炉穴状遺構などが確認されている。

弥生時代の遺跡はいくつか知られている。中溝遺跡は弥生時代後期前半の中溝式土器の標識遺跡である。上記の下那珂遺跡では弥生時代後期から終末期にかけての集落跡が確認されている。下那珂遺跡では宮崎では数少ない破鏡が出土した。120軒もの竪穴建物が検出された当該地域の拠点的集落で、環濠の存在も指摘されている。遺物には瀬戸内系土器、絵画土器などおもに瀬戸内から近畿方面との交流を示す遺物が多い点も特徴である。このほか、袋状口縁壺が出土した西片瀬原遺跡、水田遺構が確認された伊賀給遺跡などがある。

古墳時代には周辺の丘陵斜面に多くの横穴が構築される。中でも土器田東1号横穴墓は、奥壁に連続三角文と馬・鳥・人物の線刻、両側壁に連続三角文が描かれた装飾横穴であり、とくに注目できる。そのほか、石崎川沿いには古墳が点在しており、前方後円墳1基、円墳15基が現存している。また、下那珂遺跡のある丘陵上には古墳時代中期の築造で石崎川流域では最大の前方後円墳である下那珂馬場古墳がある。

古代から近世の遺跡は不明確な点が多いが、石崎川右岸に面した微高地上には片瀬原遺跡、片瀬原第2遺跡において古代の竪穴建物が多数検出されており、周辺に古代の集落が展開していたことがわかる。

竹ヶ島第2遺跡と石崎川を挟んだ北側には、広瀬城跡がある。当城は明治2(1869)年に佐土原城から藩政の中心として転城がおこなわれたものであるが、明治4(1871)年の廃藩置県にともなって完成をみなかった、いわば幻の城である。この転城にともなって、藩校学習館も移転するが、その位置がまさに竹ヶ島第2遺跡のある付近にあたる。広瀬学習館は学制公布後に川南小学校と改称するが、明治11(1878)年に全焼し、石崎川の北岸に移転する。現状では広瀬学習館に関連すると思しき遺構などは残存していない。



第17図 竹ヶ島第2遺跡と周辺の遺跡 (S=1:20000)

第II章 調査にいたる経緯と調査の経過

第1節 調査にいたる経緯

平成 27（2015）年 6 月 3 日、宅地造成の計画にともなって、宮崎市佐土原町下那珂字竹ヶ島 1914 番 14、20、21、22 における埋蔵文化財の有無について照会がなされた。当地は、以前から遺物が採集されている地点で、周知の埋蔵文化財包蔵地である「竹ヶ島第 2 遺跡」の域内にあたるため、埋蔵文化財の有無を確認するための確認調査をおこなった。その結果、計画地において埋蔵文化財の存在が確認された。

したがって、事業者と埋蔵文化財の取り扱いにかかる協議をおこない、遺構への影響などから、埋蔵文化財の本発掘調査が避けられない計画道路にあたる部分を対象として本発掘調査をおこなうこととなった。現地での調査は、平成 27 年 8 月 25 日から平成 27 年 10 月 2 日までの期間実施した。調査終了後の整理作業については、平成 28 年 5 月 13 日から平成 28 年 6 月 16 日までの期間実施した。

なお、本発掘調査に関わる文書手続きは以下の通りである。

進達文書	平成 27 年 7 月 10 日（宮教文第 386 号 1）工事届（文化財保護法第 93 条）
伝達文書	平成 27 年 7 月 24 日（宮教文第 386 号 3）
着手報告	平成 27 年 9 月 15 日（宮教文第 457 号 2）
完了報告	平成 27 年 10 月 6 日（宮教文第 457 号 4）
発見通知	平成 27 年 10 月 2 日（宮教文第 595 号）
保管証	平成 27 年 10 月 19 日（宮教文第 595 号 1）

第2節 調査の経過

調査は本発掘調査の対象となる計画道路部分に調査区を設定し、合計約 350 平方メートルの本発掘調査をおこなった（第 18 図）。

調査はまず重機を用いての表土の除去作業からおこなった。その後、発掘作業員による遺構検出作業を実施した結果、弥生時代、中世、近世などの遺構が検出された。これら遺構については順次掘削をおこなった。

掘削の進んだ遺構については、記録作業をおこなった。記録作業は調査員の手測りによる実測作業、トータルステーションを用いた遺構実測作業、35 mm フィルムカメラ、中判フィルムカメラ、デジタルカメラを用いた写真撮影によった。あわせて調査地周辺の状況や調査区全体の状況を記録するためにラジコンヘリによる空中写真撮影を実施した。

調査終了の後には、重機によって排出した土の埋め戻し作業をおこない、調査前の状況に復旧し、現地における発掘調査を終了した。



遺構検出状況



第18図 竹ヶ島第2遺跡調査区位置図 (S=1:1000)

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 調査地の基本土層

今回調査地の基本土層は以下の通りである。

I層：暗褐色土層。表土層であり、縮りは無い。近現代の遺物が含まれる。調査地での層厚は約40cm。

II層：黒褐色ないし黒色土層。いわゆるクロボク土層に該当する。遺物包含層。

III層：黄褐色から青灰色土層。地山層で砂質土。深度ごとに色調が変化し、上位ほど黄褐色で下層ほど青灰色となる。

今回調査区においては、II層は調査区北端側の一部のみに残存していた。それ以外は表土直下において地山層であるIII層が確認された。とくに調査区南半では、表土直下で確認された地山層の色調が青灰色に近い色調であった。したがって、調査地の旧地形は南から北に向かって下傾するものであったと考えられる。さらに、北側以外も緩やかに下傾しているため、調査地は調査区南端付近をおおよその頂点とした小山状の地形であったものとみられる。

第2節 弥生時代の遺構

土坑

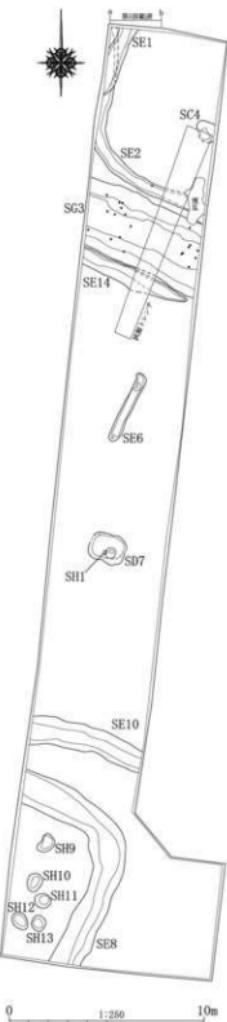
土坑4（第20図）調査区北側で確認された。東西に長い不整橢円形の土坑である。規模は長軸1.23mで、短軸方向は南側が試掘トレンドで削平されており、現存0.84mである。検出面からの深さは0.32mである。長軸方向の断面は楕状で、西側の彎曲がやや緩やかになっている。

遺物は出土していない。弥生時代の遺物包含層と共通する埋土の特徴から、この土坑は弥生時代に掘削されたものと判断できる。具体的な性格については判然としない。

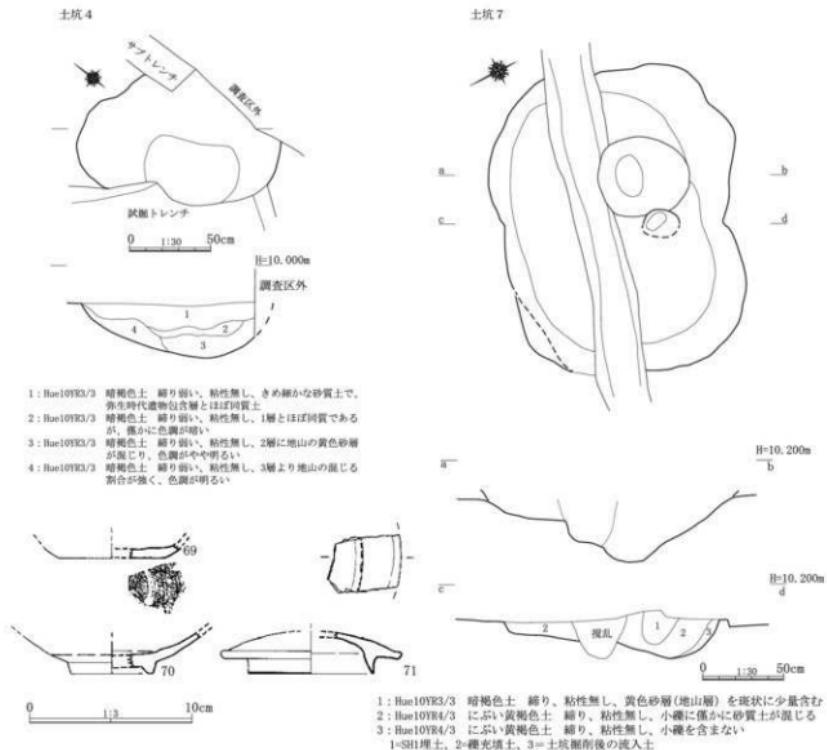
溝状遺構

溝状遺構1（第19、24図）調査区北端で確認された、南北方向にのびる溝状遺構である。調査区内ではその一部が認められるのみで、かつ溝状遺構2に切られているために、遺存状態は良くない。調査区内で確認された長さは約3.6m、幅は調査区北壁で約2.0mである。検出面からの深さは0.42mである。

本遺構からは、弥生土器片のみが出土した。のことや弥生



第19図 竹ヶ島第2遺跡
調査区平面図 (S=1:250)



第20図 土坑4、7および土坑7出土遺物 (S=1:30、1:3)

時代の遺物包含層であるII層（第24図の4層）の下から掘り込まれていることから弥生時代の遺構と判断できる。

第3節 古代の遺構

溝状遺構

溝状遺構2（第19、24図） 調査区北側で確認された。調査区の北西角から南に向かってのび、途中より大きく東側に向かってL字状に屈曲して調査区外へのびている。南北方向にのびている部分では、溝西側の肩が調査区外におよんでいるため、溝の幅は知れない。現状確認できる部分での幅は最も広いところで約0.8m、検出面からの深さは約0.2mである。

本遺構からは遺物は出土していない。ただし、埋土最下層中に古代に噴出したとされる高原スコリアと思しきスコリア粒が含まれていたことから、本遺構は古代のいずれかの時期に掘削されたものと考えられる。

第4節 中世の遺構

土坑

土坑7（第20図） 調査区中央付近で確認された。中央付近は近現代の溝によって一部削平を受けている。平面形態は東西に長い不整梢円形の土坑である。断面形は浅い皿状で、中央より南東側には一部底面がピット状に掘り窪められている部分がある。規模は、長軸1.90m、短軸1.59mで、検出面からの深さは約0.1m、上記ピット状に掘り窪められた部分の深さは0.4mである。検出面直上が表土であり包含層を挟まないことや、下に示す小礫が土坑付近の表土中にも少量ながら含まれていたことから、土坑は上部を一部削平されており、本来の規模は調査時より大きかったものと考えられる。

本土坑の埋土は、多量の小礫で構成されており、土坑はこの小礫を充填するために掘削されたものと考えられる。これに類似する遺構には、宮崎市高岡町の弓袋第2遺跡の石塔1下部に掘削された土坑がある。その土坑は軟弱な地盤に重量のある石塔を設置するためになされた基礎構築を意図したものであるが、規模や構造が極めて類似する本土坑も弓袋第2遺跡の土坑と同様な性格、すなわち石塔などの重量物を設置するための造作である可能性が高いだろう。現在、今回調査地には石塔などは確認できなかったが、畠地として利用される以前には石塔が存在していた可能性がある。

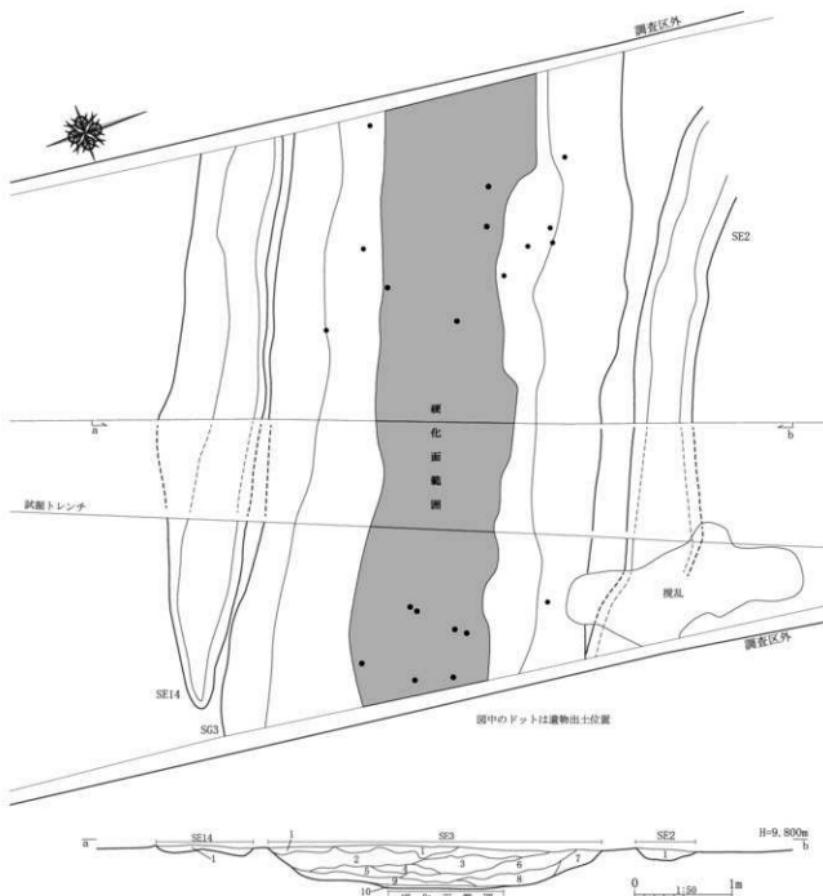
この土坑周辺では数点の遺物が出土した。69は土師器壊の小片で、糸切底である。土坑埋土中から出土した。70、71は礫が散布する上位の表土中から出土したものであり、土坑にともなるものではない。土坑が構築された時期は、埋土中に含まれていた土師器小片から中世に位置付けられると判断できる。時期的にも上記弓袋第2遺跡石塔1と一致する。

第5節 近世以降の遺構

道路状遺構

道路状遺構3（第21～23図） 調査区の北側で確認された。調査区を横切って直線的に東西方向へのびており、東西端はいずれも調査区外におよんでいる。調査区内における長さは約6.0m、幅は検出面で約3.5mであるが上部は耕作などによって削平されているため本来の幅は知れない。底面幅は約2.2mである。深さも、幅同様に本来の深さは知れないが、検出面からの深さは約0.4mである。断面は、底面がおおむね平坦で底面からゆるやかに直線的に外方へ向かって立ち上がる形態である。この遺構底面にはきわめてよく縮り、土間状になった硬化面が形成されている。硬化面は幅約1.2mで、底面中央部よりも端側の方が硬化の度合いが強い。この硬化面の存在から、本遺構を道路状遺構と判断した。地形的に南北方向にのびている砂丘地形を横切る方向にのびていることから、砂丘地形を挟んだ東西の通行路として使用されていたものと思われる。

本遺構の埋土中からは、弥生土器片、青磁片、近世陶磁器片、瓦片、銅錢、石器が出土している（第22、23図）。72、73は弥生土器の甕である。72は在地産の甕底部で底部底面は平坦、成形はやや粗雑である。73は山口式の甕底部で、雲母が多く含まれる胎土であり、大隅半島からの搬入品と判断できる。74は焼成粘土塊で、ワラ状繊維の圧痕が認められる。75は青磁碗である。小型の碗で底部に厚みがある。見込には花文かとみられる文様が、底部と胴部との境界付近には



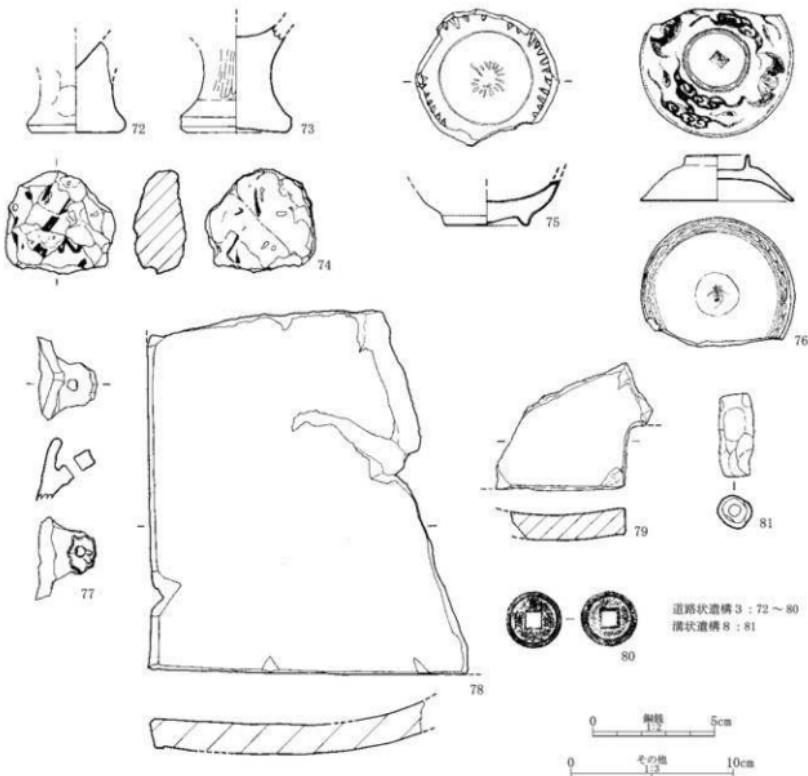
図中のドットは遺物出土位置。

SG3
1 : Hse10YR3/3 増褐色土 繰り無、粘性低い、～3mm程の根、白色スコリア粒が含まれる、地山ブロック少量含む

- SG3
1 : Hse10YR3/3 増褐色土 繰り無、粘性無、地山の砂質土と暗褐色土の混土層、～3mm程の根、白色スコリアを含む
2 : Hse10YR2/3 黒褐色土 繰り弱い、粘性無、～3mm程の根、白色スコリアを多く含む、地山砂ブロックを少量含む
3 : Hse10YR3/3 増褐色土 繰り弱い、粘性無、～3mm程の根、白色スコリアを多く含む、3cm程の地山地山ブロックを多く含む
4 : Hse10YR2/3 黑褐色土 繰り弱い、粘性無、～3mm程の根、白色スコリアを含む、わずかに地山土が混じる
5 : Hse10YR3/3 暗褐色土 繰り弱い、粘性無、～3mm程の根、白色スコリアを含む
6 : Hse10YR3/3 暗褐色土 繰り弱い、粘性無、～3mm程の根、白色スコリアを含む、5層よりやや明るい。
7 : Hse10YR4/3 にぶい・黄褐色土 繰り弱い、粘性無、地山の砂質土に暗褐色土が混じる土層
8 : Hse10YR3/2 黑褐色土 繰り弱い、粘性無、～3mm程の根、白色スコリアを含む、地山ブロックを含む
9 : Hse10YR3/3 暗褐色土 繰り弱い、粘性無、～3mm程の根、白色スコリアを含む、地山ブロックを多く含む
10 : Hse2.5Y5/2 灰黒褐色土 繰り弱い、粘性無、部分的に非常に硬く締まる部分がある（使用面）

SE14
1 : Hse10YR3/3 増褐色土 繰り無、粘性無、～3mm程の根、白色スコリア粒を含む

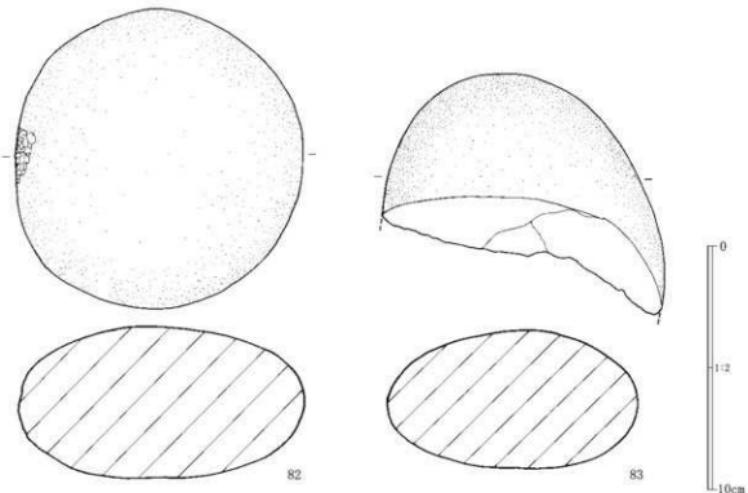
第21図 道路状遺構3、溝状遺構2、14(S=1:50)



第22図 道路状遺構3、溝状遺構8出土遺物 (S=1:3, 1:2)

囲線が、胴部には欠損のため詳細不明な文様が認められる。釉は高台内面までかかっており外底は無釉である。全体の器形が不明なため判然としないが、上田秀夫による分類のD類あるいはE類〔上田1982:p.70〕に該当しようか。76は磁器で端反碗蓋である。輪状のツマミの付く蓋で、外面には蝙蝠と雲が描かれている。見込には寿文がある。77は陶器である。特徴から薩摩焼の土瓶小片とみられる。78、79は瓦片で、平瓦か棟瓦かは判然としない。いずれも焼し瓦で、いずれの凸面にも作業台の痕跡があることから一枚作りであることが分かる。80は寛永通宝である。82、83は敲石と考えられ、82の左側面には敲打痕跡が認められる。

本遺構は埋土下層からも近世段階の遺構が出土していることから、少なくとも近世までは機能していたものとみられる。掘削年代は明確でないが、本遺構で確認された硬化面は1面のみであ



第23図 道路状遺構3出土遺物 (S=1:2)

るため、比較的短い期間のみ使用されていたようにも思われるが判然としない。

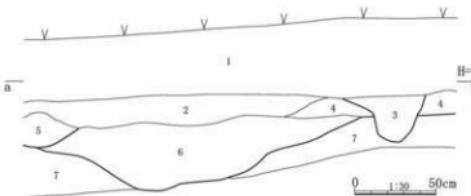
溝状遺構6（第19図） 調査区中央付近で確認された。南北方向にのびる溝状遺構である。検出段階では短い溝状遺構であったが、土坑7と同様に上部が削平されている可能性があるため、本来さらに長い溝であった可能性もあるが判然としない。検出段階での規模は、長さ約3.7m、幅約0.5mである。現状の南北端には、ピット状の掘り込みが認められるものの、この溝状遺構にともなうものかについては判然としない。

埋土中から棧瓦が出土していることから、近世以降に位置付けられる。

溝状遺構8（第19、22図） 調査区南端付近で確認された。検出面は地山層の白色砂質土であるが、第1節で示したとおり調査区南側は地山を一定程度削平されていることから本遺構も削平を受けている可能性が高い。本遺構は調査区南壁から北に向かってのび、およそ直角に西へ向かって屈曲している。溝の両端は調査区外におよんでいるため、全長は知れない。調査区内での長さは約12.0m、幅はもっとも広い部分で約1.9mである。

遺物には近世陶磁器、和釘、鉄滓がある。出土遺物から近世以降に構築された溝状遺構であると判断できる。また土錐が1点出土した（第22図81）。手捏ねによる成形で、成形時のユビオサエ痕跡が明瞭に観察できる。

溝状遺構10（第19図） 調査区南側で確認された。検出面は溝状遺構8と同じく白色砂質土であり、本遺構も一定の削平を受けている可能性が高い。本遺構は東西にのびる溝状遺構で、両端はいずれも調査区外にのびているため、全長は知れない。調査区内での長さは約5.8m、幅はもっとも広い部分で約1.4mである。



第24図 溝状遺構1、2土層断面図(調査区北壁, S=1:30)

1: Rue107W4/4 黒褐色土、縦り弱い、粘性無、土器、瓦片現代の遺物混じる
2: Rue107R3/4 細粒褐色土、縦り有、粘性無、鐵器など土器残、炭化物を含む。現代の遺物混じる
3: Rue107R4/2 黄褐色土、縦り有、粘性無、暗褐色や灰褐色土をロック、炭化物混じる
4: Rue107R3/3 細粒褐色土、縦り弱い、粘性無、きめ細かの砂質土、強生土層の包含層
5: Rue107R3/2 黒褐色土、縦り弱い、粘性無、幾つかの黒褐色のスコリア(高原スコリア)を含む
6: Rue107R4/3 にぶい黄褐色土、縦り弱い、粘性無、きめ細かな砂質土、~4mmのスコリアを含む
7: Rue107R4/1 黄褐色土、縦り弱い、粘性無、きめ細かな砂質土、ただし上部はど部地盤でない
1: 基本土層1堆、2: 掘底、3: 基本土層1堆、4: 基本土層1堆、5: 基本土層1堆

しているが、これは削平の影響によるものであり本来はさらに東へのびていたものと考えられた。調査区での長さは5.8m、幅はもっとも広い部分で約1.0mである。

本遺構からは遺物が出土しなかったため、遺物から遺構の年代を推定することができない。しかし、道路状遺構3と埋土の特徴が類似していることから、これと近い年代、すなわち近世以降のものである可能性が高い。

ピット

ピットの概要 調査区南側で5基のピットが検出された。これらのピットは、出土した遺物や埋土の特徴から、いずれも近世以降に構築されたものと判断できる。位置的には、溝状遺構8に囲まれるように所在していることから、溝状遺構8と何らかの関係を有する遺構とも思われるが、この点は判然としない。また5基のピットは規模的にも類似している。

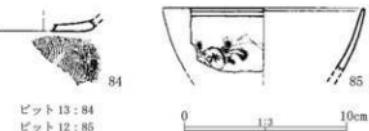
各ピットの詳細 ピット9は、一部を削平されていた。平面形が不整円形、断面形がU字形である。現存の規模は、長軸が約1.0m、検出面からの深さが約0.3mである。ピット10は平面形が楕円形、断面形がU字形である。規模は、長軸が約0.9m、検出面からの深さが約0.5mである。ピット11は平面形が不整楕円形、断面形がU字形である。規模は、長軸が約0.8m、検出面からの深さが約0.4mである。ピット12は平面形が楕円形、底面はU字形であるが、底面から1箇所ピット状に掘り込まれた部分がある。規模は長軸が約1.0m、検出面からの深さが約0.5mである。ピット13は、平面形が楕円形、底面はおむねU字形である。規模は、長軸が約0.8m、検出面からの深さが約0.4mである。

84はピット13から出土した。土器の皿であり、底面は糸切底である。85はピット12から出土した。陶磁器の碗で外縁部には二条線がめぐらされ、胴部には梅花文とみられる文様が描かれている。

遺物は、不明鉄片や近世以降の磁器が出土している。これらから本遺構は近世以降に構築された溝状遺構であると判断できる。

溝状遺構14(第19、21図)

調査区の北側で確認された。道路状遺構3の南に隣接している。地山の砂質土層で検出されたが、上部は耕作土によって削平されていると考えられる。また、溝の東端は調査区内で収束



第25図 ピット出土遺物 (S=1:3)

第6節 遺構外出土遺物

今回の調査では、これまで記述した遺構にともなわない遺物も多く出土している。いずれも小片であったが、そのうちの一部を第26図に示した。

これらはおもに表土中から出土した遺物であるが、包含層中、搅乱土中からの出土のほか、表面採集によるものもある。

86～92は弥生土器である。いずれも甕であるが、86～90が口縁部、91が胴部、92が底部の破片である。86～90、および92は器形のほか、雲母が多く含まれる胎土の特徴から、大隅半島で製作された搬入品であると判断できる。91は器形的にはその他の土器と似る物であろうが、胎土には、いわゆる宮崎小石が多く含まれているため、在地産であると判断できる。これらはいずれも山之口式あるいはそれに類するものであり、弥生時代中期中ごろに位置付けることができる資料である。

93は土師器坏である。底部の小片であり、底面には糸切りの痕跡が認められる。94は土錘である。小型で手捏ねで成形されており、その際のユビオサエ痕跡が確認できる。

95～103は陶磁器である。いずれも小片で、95は陶器の小坏である。外面の胴部中ほどより下位は無釉である。内面は貫入が著しい。96は陶器で浅い碗ないし鉢である。内面と外面の口縁端部付近は緑色、それ以外は透明の釉がかけられている。97は陶器碗である。底部から胴部にかけての破片で、全面施釉されているが、疊付部分のみ無釉である。98は磁器碗である。外面は青磁、内面は染付で、見込にはコンニャク印判の五花弁がみられ、その周間に2条の圈線がめぐらされている。99は磁器碗である。見込には文様が描かれている。100は器種不明の陶器である。残存する部分から小型で箱状の物であろうと推測できる。外面は底部および側面下部をのぞき施釉されている。内面は一部に釉薬がみられるが内面側から流れ込んだものと考えられる。また、内面には製作時の繊維圧痕と指頭圧痕跡が認められる。101、102は擂鉢である。101は九州、102は堺系であろうか。103は陶器甕である。現存する部分には砂目など認められない。

104～106は瓦片である。104、105は棟瓦である。106は平瓦の可能性も全く否定できないが、焼きなどの特徴が104、105と同じであり棟瓦の可能性が高い。いずれも表面は光沢のある褐色である。それぞれ、小口側には刻印があり、記号のようなもの（104、105）と「吉の」と読めるもの（106）がある。

107～110は石器である。107は軽石製で図での上面が椀状に削り貫かれており、その底面付近に直径約1.5cmで円形の孔が穿孔されている。用途は判然としない。108は敲石である。尾鈴山酸性岩製で、図での左側面上部付近に敲打痕跡が確認できる。表面に鉄分が認められるが、使用によるものとは断定できない。109は磨石である。図での上面に磨面が確認でき、その面には線状の擦痕跡が存在する。110は磨石である。図での上下端が欠損している。上面に磨面が確認できるほか、右側面には敲打痕跡が存在する。磨面と敲打痕の切り合い関係が明確でないために、その前後関係は判然としない。

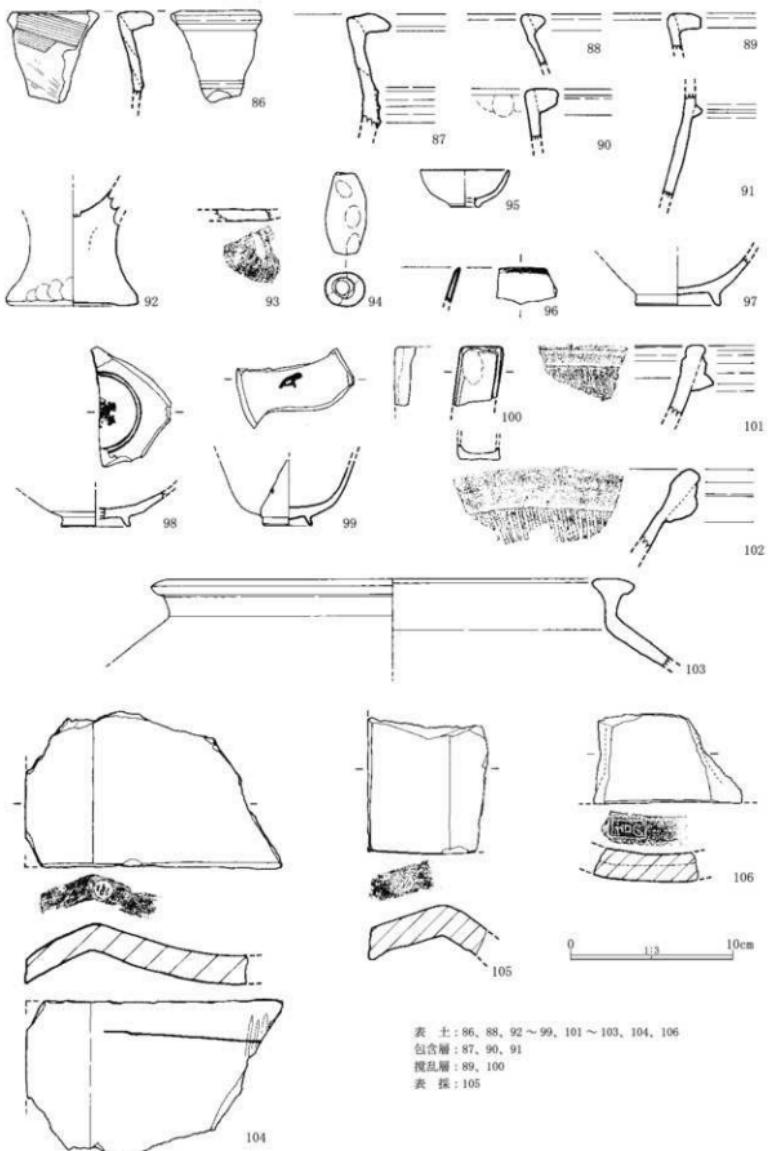
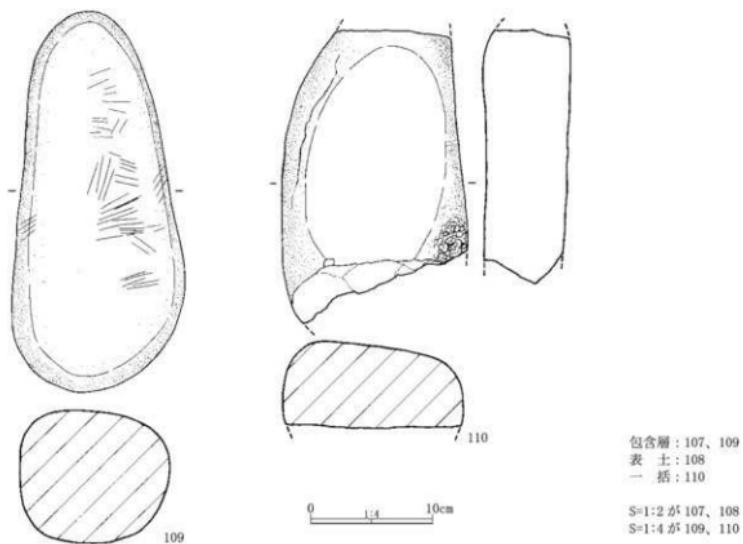
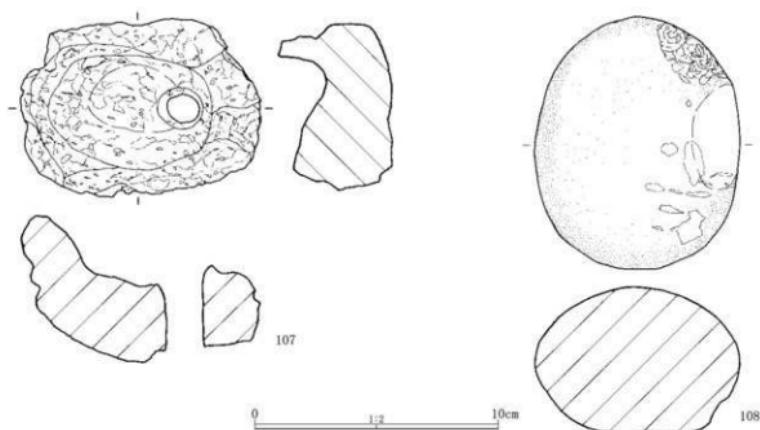


表 土 : 86, 88, 92 ~ 99, 101 ~ 103, 104, 106
 包含層 : 87, 90, 91
 捜査層 : 89, 100
 表 採 : 105

第26図 遺構外出土遺物 1 (S=1:3)



第27図 遺構外出土遺物2 (S=1:2、1:4)

第5表 竹ヶ島第2遺跡出土遺物観察表

遺物番号	種類	寸法(cm) : 原元裡定額			色調	焼成	調査		地土(上: mm F: 錆)					備考	実測番号	
		径	径深	高さ			外面	内面	A	B	C	D	E			
p. 58 第29回	土器器	—	—	—	にぶい黄褐色 10.5cm/5.2	にぶい褐色 7.5cm/4	良好	—	同軸ナダ	微少	少	—	—	—	赤底	13
	陶器 壺	—	(5.1)	—	灰褐色 7.5cm/2	灰褐色 7.5cm/3	良好	—	—	—	—	—	—	—	施釉 蛇目柄折ぎ	14
	陶器 土瓶	—	—	—	灰褐色 10.5cm/2	灰褐色 7.5cm/2	良好	—	—	—	—	—	—	—	直ね縦き直有	15
p. 61 第22回	骨生土器 盤	—	6.0	—	にぶい褐色 7.5cm/4	にぶい褐色 7.5cm/4	良好	ユビオサエ ナダ	ナダ	2 多	1 多	少	—	—	在地底	2
	骨生土器 盤	—	6.0	—	にぶい褐色 7.5cm/3	緑褐色 5cm/2	良好	タダミガキ ユビオサエ	ナダ	4 多	1 多	多	—	—	大鍋半底	1
	土製品 粘土塊	6.3	6.7	3.1	にぶい黄褐色 10.5cm/3	にぶい黄褐色 10.5cm/3	良好	—	—	—	—	—	—	—	ワラ状繊維板	3
p. 61 第22回	青磁 瓶	—	5.2	—	灰黃褐色 10.5cm/2	灰黃褐色 10.5cm/2	良好	—	—	—	—	—	—	—	施釉	5
	磁器 壺	9.4	—	2.8	明鏡灰 10cm/1	明鏡灰 5cm/1	良好	—	—	—	—	—	—	—	施釉文等	4
	陶器 土瓶	—	—	—	灰灰 10cm/1	灰灰 2.5cm/1	良好	—	—	—	—	—	—	—	—	6
p. 63 第25回	土製品 瓦	—	—	1.9	灰灰 10cm/1	灰灰 10cm/1	良好	—	—	—	—	—	—	—	一枚作り	43
	土製品 瓦	—	—	1.7	灰 5cm/1	灰 2.5cm/1	良好	—	—	—	—	—	—	—	一枚作り	10
	土製品 土罐	5.0	1.9	(長さ)	にぶい黄褐色 7.5cm/2	にぶい黄褐色 2.5cm/2	良好	ナダ ユビオサエ	ナダ	—	—	—	—	—	—	9
p. 63 第25回	土師器 盤	—	(5.0)	—	浅黄褐色 10cm/4	浅黄褐色 10cm/4	良好	ナダ	ナダ	黒焦	—	—	—	—	赤底	11
	磁器 瓶	(12.2)	—	—	灰白 5cm/1	灰白 7.5cm/1	良好	—	—	—	—	—	—	—	梅花文か	12
	骨生土器 盤	—	—	—	にぶい青褐色 5cm/4	にぶい青褐色 7.5cm/3	良好	ナダ	ハケ目	5 少	1 多	多	—	—	赤底青器 大鍋底	16
p. 65 第26回	骨生土器 盤	—	—	—	青 7.5cm/4/3	にぶい青褐色 7.5cm/3	良好	ナダ	摩滅不明	1 少	1 多	多	—	—	大鍋底	18
	骨生土器 盤	—	—	—	にぶい青褐色 7.5cm/4	にぶい青褐色 7.5cm/4	良好	ナダ	摩滅不明	5 少	1 多	多	—	—	大鍋底	17
	骨生土器 盤	—	—	—	黑褐 7.5cm/2	にぶい青褐色 7.5cm/3	良好	ナダ	ハケ目	1 少	1 多	多	—	—	大鍋底	20
p. 65 第26回	骨生土器 盤	—	—	—	にぶい青褐色 5cm/3	にぶい青褐色 7.5cm/3	良好	ナダ	ナダ	2 少	1 多	多	—	—	大鍋底	19
	骨生土器 盤	—	—	—	青 7.5cm/6/6	明鏡灰 7.5cm/6	良好	ナダ	ナダ	5 少	2 少	多	—	—	在地底	21
	骨生土器 盤	—	8.0	—	にぶい青褐色 5cm/3	明鏡灰 5cm/2	良好	ナダ ユビオサエ	ナダ	3 少	4 多	少	—	—	大鍋底	22
p. 65 第26回	土師器 瓶	—	—	—	灰黃褐色 10cm/2	にぶい青褐色 7.5cm/4	良好	—	同軸ナダ	—	—	微焦	—	—	赤底	23
	土製品 土罐	5.0 (長さ)	—	—	にぶい黄褐色 10cm/2	にぶい黄褐色 10cm/2	良好	ナダ ユビオサエ	ナダ	1 少	—	—	—	—	—	24
	陶器 小瓶	(5.3)	2.2	1.7	灰褐 7.5cm/5/2	灰褐 2.5cm/2	良好	—	—	—	—	—	—	—	施釉、貯入	29
p. 65 第26回	磁器 瓶	—	—	—	灰褐 7.5cm/2	維織灰 2.5cm/4	良好	—	—	—	—	—	—	—	施釉	25
	陶器 瓶	—	(5.1)	—	にぶい青褐色 2.5cm/4	にぶい青褐色 2.5cm/4	良好	—	—	—	—	—	—	—	こんなにかく印 判別	28
	磁器 瓶	—	(4.2)	—	維織灰 7.5cm/7/1	灰白 10cm/1	良好	—	—	—	—	—	—	—	見込み文様有	27
p. 65 第26回	陶器 瓶	—	2.8	—	灰白 N/A/0	灰白 N/A/0	良好	—	—	—	—	—	—	—	内面布痕有	30
	陶器 不明	(3.7)	3.1	(1.2)	にぶい黄褐色 10cm/7/2	灰 7.5cm/5/1	良好	—	—	—	—	—	—	—	九州系か	31
	陶器 怪体	—	—	—	暗赤褐 2.5cm/3	2.5cm/4	良好	同軸ナダ	同軸ナダ	—	—	—	—	—	怪体	33
p. 65 第26回	陶器 怪体	—	—	—	にぶい褐 7.5cm/6/4	明鏡灰 7.5cm/5/3	良好	同軸ナダ	同軸ナダ	—	—	—	—	—	—	32
	陶器 壺	(29.6)	—	—	灰褐 7.5cm/4/1	灰褐 2.5cm/4/1	良好	—	—	—	—	—	—	—	—	35
	土製品 核瓦	—	—	1.8	にぶい黄褐色 10cm/6/3	灰褐 7.5cm/5/2	良好	—	—	—	—	—	—	—	—	34
p. 66 第27回	土製品 核瓦	—	—	2.0	にぶい褐 7.5cm/5/3	明鏡灰 7.5cm/5/4	良好	—	—	—	—	—	—	—	—	36
	土製品 核瓦	—	—	1.7	にぶい黄褐色 10cm/6/3	灰褐 7.5cm/5/3	良好	—	—	—	—	—	—	—	—	39
	陶器 怪體	(24.6)	15.3	(7.5)	材質	—	—	—	—	—	—	—	—	—	宋唐 番号	40
p. 61 第22回	洞残	2.3	2.3	0.1	洞	—	實水通室	—	—	—	—	—	—	—	—	44
	洞残	12.2	11.8	6.2	洞	—	細面に縦打痕有	—	—	—	—	—	—	—	—	7
p. 62 第23回	礫石	(9.8)	(11.5)	5.7	洞	—	縦打痕は不明瞭	—	—	—	—	—	—	—	—	8
	107 不明製品	7.3	9.8	6.1	洞	—	上面に住み有。穿孔1箇所有。	—	—	—	—	—	—	—	—	38
p. 66 第27回	108 潜石	10.5	8.4	6.0	洞	—	縦打痕有。潛水面。一部に断分が付着する。	—	—	—	—	—	—	—	—	37
	109 潜石	31.1	14.5	10.9	洞	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	39
110 潜石	(24.6)	15.3	(7.5)	洞	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	40

第IV章　まとめ

竹ヶ島第2遺跡は、宮崎市北部の佐土原町域を流れる石崎川の下流域右岸に位置する。宮崎市域海岸部に形成される砂丘状地形上の突端付近にあり、石崎川を望む位置にある。調査時点における遺跡周辺の標高は約10mであるが、削平によって旧地形は改変されていた。今回の発掘調査は宅地の開発にともなって実施された。調査面積が狭いことや削平などの影響から、断片的情報を得ることができたに過ぎないがその成果を以下に列記したい。

調査の結果、弥生時代、古代、中世、近世の遺構が確認され、これらにともなって各時代の遺物が出土した。

弥生時代の遺構には、土坑4、溝状遺構1がある。いずれも遺物が出土しなかったものの、埋土の特徴から当該時期の遺構と判断した。具体的な時期は明確ではないものの、今回調査では包含層中などから弥生時代中期の土器が出土していることから、上記2つの遺構もこの時期に位置付けられる可能性が高いだろう。これまで、石崎川下流域では弥生時代中期に遡る弥生時代遺跡は確認されていない。きわめて断片的な情報ではあるものの、今回調査成果は当該地域での弥生時代の様相を知る上で重要であろう。

古代の遺構には溝状遺構2がある。調査区内においてL字状に屈曲するものの、その正確は判然としなかった。

中世の遺構には土坑7がある。不整円形の土坑で、多量の小礫が充填されていることなどが、宮崎市高岡町の弓袋第2遺跡で確認された石塔の基礎構造と類似していることから、本遺構も同様のものと想定された。石塔などは確認されていないが、かつて調査地周辺には墓域として利用されていた時期があった可能性がある。

近世以降に位置付けられる遺構には、道路状遺構3、溝状遺構6、8、10、14および5基のピットがある。道路状遺構のほかは、その性格などが判然としないものの当該時期にも周辺に人々の生活が営まれていたことは明らかである。

また、当地は明治初頭に佐土原城から広瀬城への転城にともなって、設置された広瀬学習館が存在していた付近にあたる。今回の調査では、これに関わると判断できる遺構は確認できなかつた。今回調査で出土した瓦片がこれに関連する遺物の可能性もあるが判然としない。

参考文献

佐土原町史編纂委員会 1982『佐土原町史』佐土原町

上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2 日本貿易陶磁研究会 pp. 55-70

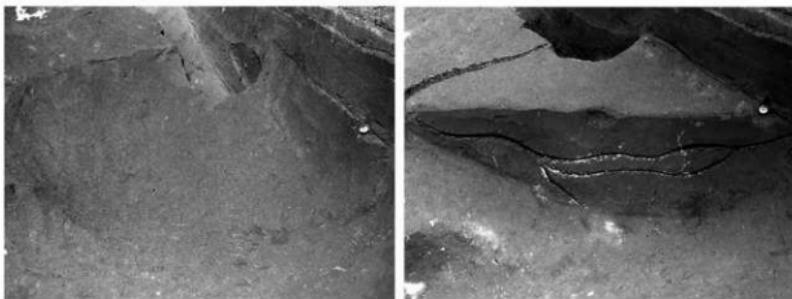
宮崎市教育委員会編 2016『佐土原城跡第6次調査』宮崎市教育委員会文化財調査報告書第109集 宮崎市教育委員会



上：調査区周辺空中写真（西から、奥は日向灘）

下：調査区全景空中写真（左が北）

図版 20



左:土坑4(南西から)、右:土坑4土層堆積状況(南西から)

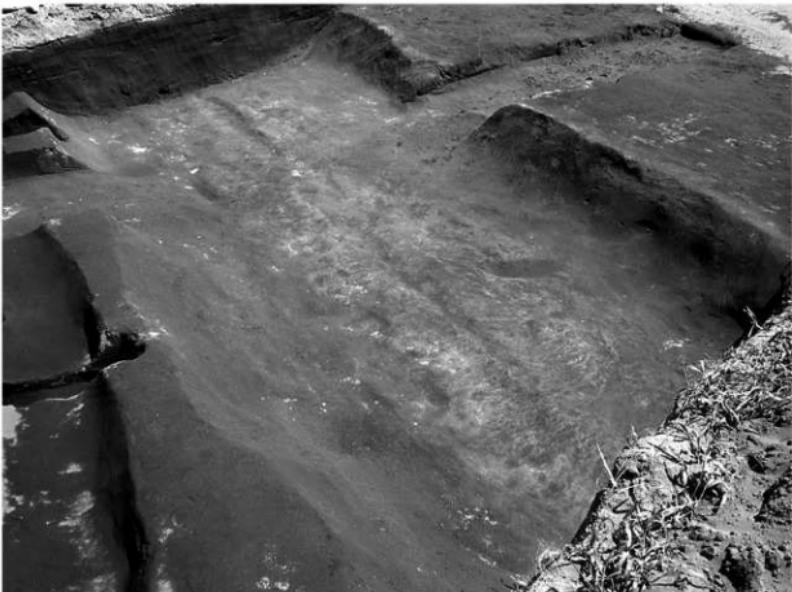


左上:土坑7検出状況(北から)

左下:同土層堆積状況(西から)

右:同出土遺物





上:道路状遺構 3(北西から)

中:同土層堆積状況(東から)

下:同検出状況(東から)





上:道路状遺構 3 遺物出土状況(北西から)、下左:同部分(東から)

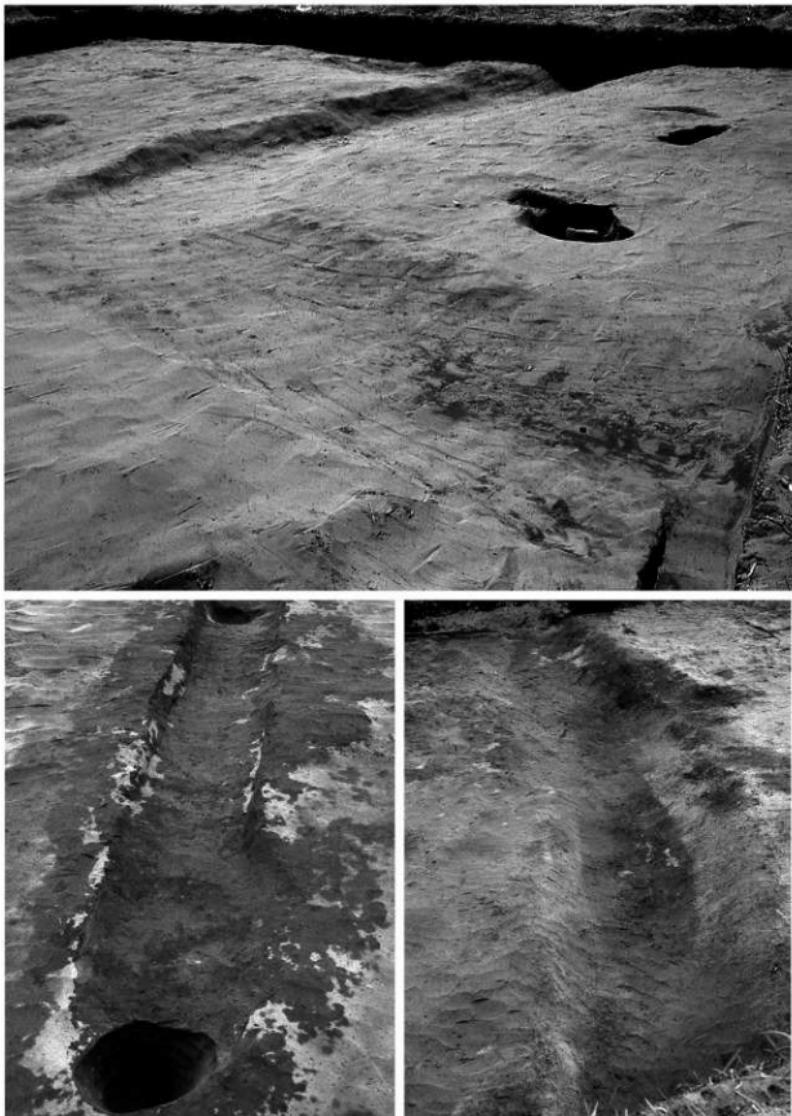
下右:同出土遺物

上左:溝状遺構 1、2 土層堆積状況(南から)

上右:同検出状況(南から)

下:溝状遺構 2(南西から)





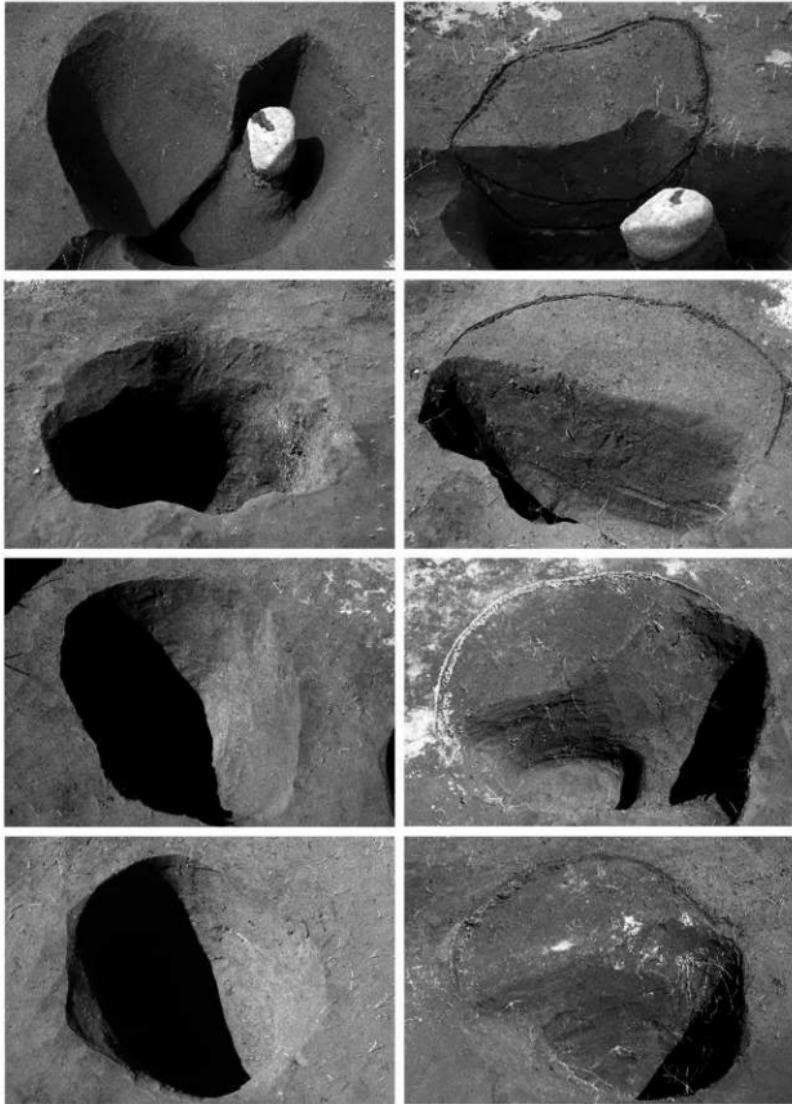
上:溝状遺構 8(北東から)、下左:溝状遺構 6(北から)、下右:溝状遺構10(東から)



上:溝状遺構14(東から)

下:溝状遺構、ピット出土遺物





1段目左: ピット9(南から)、右: 同土層断面、2段目左: ピット10(東から)、同右: 同土層断面
3段目左: ピット12(南東から)、右: 同土層断面、4段目左: ピット13(南東から)、同右: 同土層断面



遗構外出土遺物(弥生土器)



遺構外出土遺物(弥生土器以外)



遗构外出土遗物(瓦)



遗构外出土遗物(石器)

報告書抄録

ふりがな	つわだだい2いせき・たけがしまだい2いせき							
書名	津和田第2遺跡・竹ヶ島第2遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第134集							
編集者名	西嶋 剛広							
発行機関	宮崎市教育委員会							
所在地	〒 889-1696 宮崎市清武町西新町1番地1 TEL 0985 - 85 - 1178							
発行年月日	2021年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	
つわだだい2いせき 津和田第2遺跡	みやざきしほんごうきたかたあづわだ 宮崎市本郷・北方字津和田	45201	25-028	31° 52' 25"	131° 25' 36"	H. 27. 5. 11 ～ H. 27. 8. 6	300 m ²	
たけがしまだい2いせき 竹ヶ島第2遺跡	みやざきしおどわらちょうしもじま 宮崎市佐土原町下田島		19-005	32° 00' 43"	131° 28' 36"	H. 27. 8. 25 ～ H. 27. 10. 2		350 m ²
調査原因	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
津和田第2遺跡	集合住宅建設	散布地	弥生 古代 近世	周溝状遺構 土坑墓	弥生土器 喫煙具	近世土坑墓から、煙管、火打金、火打石がセットで出土した。		
竹ヶ島第2遺跡	宅地造成	散布地	中世 近世	礫敷土坑 道路状遺構	陶磁器 土師器	石塔の基礎とみられる礫敷土坑(中世)と道路状遺構(近世)が確認された。		
要約	津和田第2遺跡	弥生時代、古代、近世などの遺構や遺物が確認された。大淀川南部の微高地上における集落の動態を知る検討材料となる。						
	竹ヶ島第2遺跡	石崎川河口域の砂丘地形上にある遺跡である。当該地区での弥生時代の様相の一端が明らかになったほか、近世以降における土地利用の様相をうかがえる調査結果が得られた。						

宮崎市文化財調査報告書 第134集

津和田第2遺跡・竹ヶ島第2遺跡

—集合住宅建設、宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2021年3月

発行 宮崎市教育委員会